

武蔵野日曜集会 復活節

よみがえりのイエス

―ルカ伝第24章―

1957年4月21日

小池辰雄

聖書は大きなドラマ 異次元的なものがぶつかってくる 永遠の生命を得る 説教ではなく告白 暗黒の四位一体からの解放 靈魂の引っくり返り イエス自ら近づきて 受肉とは神の近づき 私たちの後からキリストは近づいている 「共に」から「中へ」 無信・絶信 蜘蛛の巣の如く吹き飛ばされる 自然・必然・自由が一如 肉体は散っても生命は散らない 血気の体あり 霊の体あり 祈り 感話懇親会での感話 復活祭祈禱会

【ルカ24】

1 一週^{まわり}の初^{はじめ}の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。²然^{しか}るに石の既に墓より転^{まろ}し除^のけあるを見、³内に入りたるに、主イエスの屍^{しかばね}体^みを見ず、⁴これが為に狼狽^{うろた}えおりしに、視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人その傍^{かたわ}らに立てり。⁵女たち懼^{おそ}れて面^{おもて}を地に伏せたれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。⁶彼は此処に在^{いま}さず、甦^{よみが}えり給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶^{おも}い出でよ。⁷即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付^{わた}され、十字架につけられ、かつ三日めに甦^{よみが}えるべし」と言い給えり』⁸ここに彼らその御言を憶い出で、⁹墓より歸りて、凡て此等^{すべ}のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。¹¹使徒たちは其の言^{こと}を妄語^{たわごと}と思いて信ぜず。¹²「ペテロは起^たちて墓に走りゆき、屈^{かが}みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり」

¹³視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、¹⁴凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。¹⁶されど彼らの目遮^{ひさ}えられて、イエスたるを認むること能わず。¹⁷イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言^{こと}は何ぞや』かれら悲しげなる状^{よう}にて立ち止^{とど}まり、¹⁸その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓^{やど}り居て、独^{ひと}り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』¹⁹イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業^{わざ}に



も言にも能力ある預言者なりしに、²⁰祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、²²なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風墓に往きたるに、²³屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』²⁵イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』²⁷かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。³⁰共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、³¹彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えなくなり給う。³²かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』³⁷³⁸³⁹⁴⁰⁴¹⁴²⁴³⁴⁴⁴⁵⁴⁶⁴⁷⁴⁸⁴⁹⁵⁰⁵¹⁵²⁵³⁵⁴⁵⁵⁵⁶⁵⁷⁵⁸⁵⁹⁶⁰⁶¹⁶²⁶³⁶⁴⁶⁵⁶⁶⁶⁷⁶⁸⁶⁹⁷⁰⁷¹⁷²⁷³⁷⁴⁷⁵⁷⁶⁷⁷⁷⁸⁷⁹⁸⁰⁸¹⁸²⁸³⁸⁴⁸⁵⁸⁶⁸⁷⁸⁸⁸⁹⁹⁰⁹¹⁹²⁹³⁹⁴⁹⁵⁹⁶⁹⁷⁹⁸⁹⁹¹⁰⁰¹⁰¹¹⁰²¹⁰³¹⁰⁴¹⁰⁵¹⁰⁶¹⁰⁷¹⁰⁸¹⁰⁹¹¹⁰¹¹¹¹¹²¹¹³¹¹⁴¹¹⁵¹¹⁶¹¹⁷¹¹⁸¹¹⁹¹²⁰¹²¹¹²²¹²³¹²⁴¹²⁵¹²⁶¹²⁷¹²⁸¹²⁹¹³⁰¹³¹¹³²¹³³¹³⁴¹³⁵¹³⁶¹³⁷¹³⁸¹³⁹¹⁴⁰¹⁴¹¹⁴²¹⁴³¹⁴⁴¹⁴⁵¹⁴⁶¹⁴⁷¹⁴⁸¹⁴⁹¹⁵⁰¹⁵¹¹⁵²¹⁵³¹⁵⁴¹⁵⁵¹⁵⁶¹⁵⁷¹⁵⁸¹⁵⁹¹⁶⁰¹⁶¹¹⁶²¹⁶³¹⁶⁴¹⁶⁵¹⁶⁶¹⁶⁷¹⁶⁸¹⁶⁹¹⁷⁰¹⁷¹¹⁷²¹⁷³¹⁷⁴¹⁷⁵¹⁷⁶¹⁷⁷¹⁷⁸¹⁷⁹¹⁸⁰¹⁸¹¹⁸²¹⁸³¹⁸⁴¹⁸⁵¹⁸⁶¹⁸⁷¹⁸⁸¹⁸⁹¹⁹⁰¹⁹¹¹⁹²¹⁹³¹⁹⁴¹⁹⁵¹⁹⁶¹⁹⁷¹⁹⁸¹⁹⁹²⁰⁰²⁰¹²⁰²²⁰³²⁰⁴²⁰⁵²⁰⁶²⁰⁷²⁰⁸²⁰⁹²¹⁰²¹¹²¹²²¹³²¹⁴²¹⁵²¹⁶²¹⁷²¹⁸²¹⁹²²⁰²²¹²²²²²³²²⁴²²⁵²²⁶²²⁷²²⁸²²⁹²³⁰²³¹²³²²³³²³⁴²³⁵²³⁶²³⁷²³⁸²³⁹²⁴⁰²⁴¹²⁴²²⁴³²⁴⁴²⁴⁵²⁴⁶²⁴⁷²⁴⁸²⁴⁹²⁵⁰²⁵¹²⁵²²⁵³²⁵⁴²⁵⁵²⁵⁶²⁵⁷²⁵⁸²⁵⁹²⁶⁰²⁶¹²⁶²²⁶³²⁶⁴²⁶⁵²⁶⁶²⁶⁷²⁶⁸²⁶⁹²⁷⁰²⁷¹²⁷²²⁷³²⁷⁴²⁷⁵²⁷⁶²⁷⁷²⁷⁸²⁷⁹²⁸⁰²⁸¹²⁸²²⁸³²⁸⁴²⁸⁵²⁸⁶²⁸⁷²⁸⁸²⁸⁹²⁹⁰²⁹¹²⁹²²⁹³²⁹⁴²⁹⁵²⁹⁶²⁹⁷²⁹⁸²⁹⁹³⁰⁰³⁰¹³⁰²³⁰³³⁰⁴³⁰⁵³⁰⁶³⁰⁷³⁰⁸³⁰⁹³¹⁰³¹¹³¹²³¹³³¹⁴³¹⁵³¹⁶³¹⁷³¹⁸³¹⁹³²⁰³²¹³²²³²³³²⁴³²⁵³²⁶³²⁷³²⁸³²⁹³³⁰³³¹³³²³³³³³⁴³³⁵³³⁶³³⁷³³⁸³³⁹³⁴⁰³⁴¹³⁴²³⁴³³⁴⁴³⁴⁵³⁴⁶³⁴⁷³⁴⁸³⁴⁹³⁵⁰³⁵¹³⁵²³⁵³³⁵⁴³⁵⁵³⁵⁶³⁵⁷³⁵⁸³⁵⁹³⁶⁰³⁶¹³⁶²³⁶³³⁶⁴³⁶⁵³⁶⁶³⁶⁷³⁶⁸³⁶⁹³⁷⁰³⁷¹³⁷²³⁷³³⁷⁴³⁷⁵³⁷⁶³⁷⁷³⁷⁸³⁷⁹³⁸⁰³⁸¹³⁸²³⁸³³⁸⁴³⁸⁵³⁸⁶³⁸⁷³⁸⁸³⁸⁹³⁹⁰³⁹¹³⁹²³⁹³³⁹⁴³⁹⁵³⁹⁶³⁹⁷³⁹⁸³⁹⁹⁴⁰⁰⁴⁰¹⁴⁰²⁴⁰³⁴⁰⁴⁴⁰⁵⁴⁰⁶⁴⁰⁷⁴⁰⁸⁴⁰⁹⁴¹⁰⁴¹¹⁴¹²⁴¹³⁴¹⁴⁴¹⁵⁴¹⁶⁴¹⁷⁴¹⁸⁴¹⁹⁴²⁰⁴²¹⁴²²⁴²³⁴²⁴⁴²⁵⁴²⁶⁴²⁷⁴²⁸⁴²⁹⁴³⁰⁴³¹⁴³²⁴³³⁴³⁴⁴³⁵⁴³⁶⁴³⁷⁴³⁸⁴³⁹⁴⁴⁰⁴⁴¹⁴⁴²⁴⁴³⁴⁴⁴⁴⁴⁵⁴⁴⁶⁴⁴⁷⁴⁴⁸⁴⁴⁹⁴⁵⁰⁴⁵¹⁴⁵²⁴⁵³⁴⁵⁴⁴⁵⁵⁴⁵⁶⁴⁵⁷⁴⁵⁸⁴⁵⁹⁴⁶⁰⁴⁶¹⁴⁶²⁴⁶³⁴⁶⁴⁴⁶⁵⁴⁶⁶⁴⁶⁷⁴⁶⁸⁴⁶⁹⁴⁷⁰⁴⁷¹⁴⁷²⁴⁷³⁴⁷⁴⁴⁷⁵⁴⁷⁶⁴⁷⁷⁴⁷⁸⁴⁷⁹⁴⁸⁰⁴⁸¹⁴⁸²⁴⁸³⁴⁸⁴⁴⁸⁵⁴⁸⁶⁴⁸⁷⁴⁸⁸⁴⁸⁹⁴⁹⁰⁴⁹¹⁴⁹²⁴⁹³⁴⁹⁴⁴⁹⁵⁴⁹⁶⁴⁹⁷⁴⁹⁸⁴⁹⁹⁵⁰⁰⁵⁰¹⁵⁰²⁵⁰³⁵⁰⁴⁵⁰⁵⁵⁰⁶⁵⁰⁷⁵⁰⁸⁵⁰⁹⁵¹⁰⁵¹¹⁵¹²⁵¹³⁵¹⁴⁵¹⁵⁵¹⁶⁵¹⁷⁵¹⁸⁵¹⁹⁵²⁰⁵²¹⁵²²⁵²³⁵²⁴⁵²⁵⁵²⁶⁵²⁷⁵²⁸⁵²⁹⁵³⁰⁵³¹⁵³²⁵³³⁵³⁴⁵³⁵⁵³⁶⁵³⁷⁵³⁸⁵³⁹⁵⁴⁰⁵⁴¹⁵⁴²⁵⁴³⁵⁴⁴⁵⁴⁵⁵⁴⁶⁵⁴⁷⁵⁴⁸⁵⁴⁹⁵⁵⁰⁵⁵¹⁵⁵²⁵⁵³⁵⁵⁴⁵⁵⁵⁵⁵⁶⁵⁵⁷⁵⁵⁸⁵⁵⁹⁵⁶⁰⁵⁶¹⁵⁶²⁵⁶³⁵⁶⁴⁵⁶⁵⁵⁶⁶⁵⁶⁷⁵⁶⁸⁵⁶⁹⁵⁷⁰⁵⁷¹⁵⁷²⁵⁷³⁵⁷⁴⁵⁷⁵⁵⁷⁶⁵⁷⁷⁵⁷⁸⁵⁷⁹⁵⁸⁰⁵⁸¹⁵⁸²⁵⁸³⁵⁸⁴⁵⁸⁵⁵⁸⁶⁵⁸⁷⁵⁸⁸⁵⁸⁹⁵⁹⁰⁵⁹¹⁵⁹²⁵⁹³⁵⁹⁴⁵⁹⁵⁵⁹⁶⁵⁹⁷⁵⁹⁸⁵⁹⁹⁶⁰⁰⁶⁰¹⁶⁰²⁶⁰³⁶⁰⁴⁶⁰⁵⁶⁰⁶⁶⁰⁷⁶⁰⁸⁶⁰⁹⁶¹⁰⁶¹¹⁶¹²⁶¹³⁶¹⁴⁶¹⁵⁶¹⁶⁶¹⁷⁶¹⁸⁶¹⁹⁶²⁰⁶²¹⁶²²⁶²³⁶²⁴⁶²⁵⁶²⁶⁶²⁷⁶²⁸⁶²⁹⁶³⁰⁶³¹⁶³²⁶³³⁶³⁴⁶³⁵⁶³⁶⁶³⁷⁶³⁸⁶³⁹⁶⁴⁰⁶⁴¹⁶⁴²⁶⁴³⁶⁴⁴⁶⁴⁵⁶⁴⁶⁶⁴⁷⁶⁴⁸⁶⁴⁹⁶⁵⁰⁶⁵¹⁶⁵²⁶⁵³⁶⁵⁴⁶⁵⁵⁶⁵⁶⁶⁵⁷⁶⁵⁸⁶⁵⁹⁶⁶⁰⁶⁶¹⁶⁶²⁶⁶³⁶⁶⁴⁶⁶⁵⁶⁶⁶⁶⁶⁷⁶⁶⁸⁶⁶⁹⁶⁷⁰⁶⁷¹⁶⁷²⁶⁷³⁶⁷⁴⁶⁷⁵⁶⁷⁶⁶⁷⁷⁶⁷⁸⁶⁷⁹⁶⁸⁰⁶⁸¹⁶⁸²⁶⁸³⁶⁸⁴⁶⁸⁵⁶⁸⁶⁶⁸⁷⁶⁸⁸⁶⁸⁹⁶⁹⁰⁶⁹¹⁶⁹²⁶⁹³⁶⁹⁴⁶⁹⁵⁶⁹⁶⁶⁹⁷⁶⁹⁸⁶⁹⁹⁷⁰⁰⁷⁰¹⁷⁰²⁷⁰³⁷⁰⁴⁷⁰⁵⁷⁰⁶⁷⁰⁷⁷⁰⁸⁷⁰⁹⁷¹⁰⁷¹¹⁷¹²⁷¹³⁷¹⁴⁷¹⁵⁷¹⁶⁷¹⁷⁷¹⁸⁷¹⁹⁷²⁰⁷²¹⁷²²⁷²³⁷²⁴⁷²⁵⁷²⁶⁷²⁷⁷²⁸⁷²⁹⁷³⁰⁷³¹⁷³²⁷³³⁷³⁴⁷³⁵⁷³⁶⁷³⁷⁷³⁸⁷³⁹⁷⁴⁰⁷⁴¹⁷⁴²⁷⁴³⁷⁴⁴⁷⁴⁵⁷⁴⁶⁷⁴⁷⁷⁴⁸⁷⁴⁹⁷⁵⁰⁷⁵¹⁷⁵²⁷⁵³⁷⁵⁴⁷⁵⁵⁷⁵⁶⁷⁵⁷⁷⁵⁸⁷⁵⁹⁷⁶⁰⁷⁶¹⁷⁶²⁷⁶³⁷⁶⁴⁷⁶⁵⁷⁶⁶⁷⁶⁷⁷⁶⁸⁷⁶⁹⁷⁷⁰⁷⁷¹⁷⁷²⁷⁷³⁷⁷⁴⁷⁷⁵⁷⁷⁶⁷⁷⁷⁷⁷⁸⁷⁷⁹⁷⁸⁰⁷⁸¹⁷⁸²⁷⁸³⁷⁸⁴⁷⁸⁵⁷⁸⁶⁷⁸⁷⁷⁸⁸⁷⁸⁹⁷⁹⁰⁷⁹¹⁷⁹²⁷⁹³⁷⁹⁴⁷⁹⁵⁷⁹⁶⁷⁹⁷⁷⁹⁸⁷⁹⁹⁸⁰⁰⁸⁰¹⁸⁰²⁸⁰³⁸⁰⁴⁸⁰⁵⁸⁰⁶⁸⁰⁷⁸⁰⁸⁸⁰⁹⁸¹⁰⁸¹¹⁸¹²⁸¹³⁸¹⁴⁸¹⁵⁸¹⁶⁸¹⁷⁸¹⁸⁸¹⁹⁸²⁰⁸²¹⁸²²⁸²³⁸²⁴⁸²⁵⁸²⁶⁸²⁷⁸²⁸⁸²⁹⁸³⁰⁸³¹⁸³²⁸³³⁸³⁴⁸³⁵⁸³⁶⁸³⁷⁸³⁸⁸³⁹⁸⁴⁰⁸⁴¹⁸⁴²⁸⁴³⁸⁴⁴⁸⁴⁵⁸⁴⁶⁸⁴⁷⁸⁴⁸⁸⁴⁹⁸⁵⁰⁸⁵¹⁸⁵²⁸⁵³⁸⁵⁴⁸⁵⁵⁸⁵⁶⁸⁵⁷⁸⁵⁸⁸⁵⁹⁸⁶⁰⁸⁶¹⁸⁶²⁸⁶³⁸⁶⁴⁸⁶⁵⁸⁶⁶⁸⁶⁷⁸⁶⁸⁸⁶⁹⁸⁷⁰⁸⁷¹⁸⁷²⁸⁷³⁸⁷⁴⁸⁷⁵⁸⁷⁶⁸⁷⁷⁸⁷⁸⁸⁷⁹⁸⁸⁰⁸⁸¹⁸⁸²⁸⁸³⁸⁸⁴⁸⁸⁵⁸⁸⁶⁸⁸⁷⁸⁸⁸⁸⁸⁹⁸⁹⁰⁸⁹¹⁸⁹²⁸⁹³⁸⁹⁴⁸⁹⁵⁸⁹⁶⁸⁹⁷⁸⁹⁸⁸⁹⁹⁹⁰⁰⁹⁰¹⁹⁰²⁹⁰³⁹⁰⁴⁹⁰⁵⁹⁰⁶⁹⁰⁷⁹⁰⁸⁹⁰⁹⁹¹⁰⁹¹¹⁹¹²⁹¹³⁹¹⁴⁹¹⁵⁹¹⁶⁹¹⁷⁹¹⁸⁹¹⁹⁹²⁰⁹²¹⁹²²⁹²³⁹²⁴⁹²⁵⁹²⁶⁹²⁷⁹²⁸⁹²⁹⁹³⁰⁹³¹⁹³²⁹³³⁹³⁴⁹³⁵⁹³⁶⁹³⁷⁹³⁸⁹³⁹⁹⁴⁰⁹⁴¹⁹⁴²⁹⁴³⁹⁴⁴⁹⁴⁵⁹⁴⁶⁹⁴⁷⁹⁴⁸⁹⁴⁹⁹⁵⁰⁹⁵¹⁹⁵²⁹⁵³⁹⁵⁴⁹⁵⁵⁹⁵⁶⁹⁵⁷⁹⁵⁸⁹⁵⁹⁹⁶⁰⁹⁶¹⁹⁶²⁹⁶³⁹⁶⁴⁹⁶⁵⁹⁶⁶⁹⁶⁷⁹⁶⁸⁹⁶⁹⁹⁷⁰⁹⁷¹⁹⁷²⁹⁷³⁹⁷⁴⁹⁷⁵⁹⁷⁶⁹⁷⁷⁹⁷⁸⁹⁷⁹⁹⁸⁰⁹⁸¹⁹⁸²⁹⁸³⁹⁸⁴⁹⁸⁵⁹⁸⁶⁹⁸⁷⁹⁸⁸⁹⁸⁹⁹⁹⁰⁹⁹¹⁹⁹²⁹⁹³⁹⁹⁴⁹⁹⁵⁹⁹⁶⁹⁹⁷⁹⁹⁸⁹⁹⁹1000

●聖書は大きなドラマ

この幕屋を開きまして、今年で16年です。その第1回からの方は、内田君ひとりですが、いろいろ月は去り、日は移り、人は変りというわけです。けれども、変わらないで進み行くのはキリストです。たとえ私が信仰を棄てましても、福音は進んで行きます。キリストによって開かれた神の国は勝利して行きます。

今、私たちは20世紀の後半に踏み込んで参りましたが、世界の情勢は月に年になかなか危険な様相を示しております。今やご承知の通り原子力時代。その戦争の武器が昔とはすつ



かり質を変えて、原子力兵器というような核兵器が核爆発という、いろいろな武器の中に盛って展開しつつあるというようなわけです。また一面、文明の利器としても、これを大いに応用し始めていますが、しかし、人類のすることは分裂している。20世紀の人類は、分裂病にかかっている。本当の中心がない。

藤井先生が嘗て、

「日本は何をもつて世界に貢献すべきか」

という論説を書かれました。ここに居られる先生です（壁にかかっている写真を指されて）。私が親しく、その最後の5年間を学んだ先生です。これは日本が第四文明の国として、天的な霊的なものをもって貢献する最後の課題が残っているということを予見されまして、先生は仆れました。

ギリシヤ的なものは思弁的であつて、神のことを思弁した。ローマ人は非常に人間性が豊かで、人間の問題、文芸復興、ルネッサンスにおいて、人間の事態を花咲かせました。ゲルマン人は非常に意志的な民であつて、「救済」の問題を、マルティン・ルッターの宗教改革によって新しく掴み直した。そして、最後にこの来世の問題が残っている。

藤井先生はこれを「来世」という表現で言っておられます。神学的な言葉でいうと、「エスカトロギー」「終末」の問題です。

「一番、東洋の直観的な能力をもつて、この世界の音信を知らせるべき使命を負わ
せられている」

というように言われました。藤井先生ご自身はその偉大な来世の問題を『^{このつじ}羔の婚姻』という雄大な叙事詩で表わしました。日本人の大方が知りません。クリスチャンもあまり知りません。ここにご覧に入れますが、これがその『羔の婚姻』という全詩篇です。ダンテの『神曲』、ゲーテの『ファウスト』、ミルトンの『パラダイス・ロスト』と並び称せられていい雄大な、その構想においては、あるいは一番雄大であるといつてもいいかも知れません。残念ながら未完成に終わっておりますが、先生がもう2年も生きておられたら完成されたと思う。未完成交響楽として終わっていますが、その響きは限りなく今、響いていると思います。黙示録がその主題になるわけです。創世記から黙示録に至るまでの聖書の事態、また人類の歴史の究極にわたつての、大きく大観されたところの詩です。「羔」は、いうまでもなくキリストです。キリストが真に人類を花嫁として、新天地を来らしめる時、それが聖書の黙示録において非常な高次な言葉をもつて表現している世界です。

そういうキリスト教は大きな劇（ドラマ）でありまして、「聖書は何か？」と問われるならば、「聖書は聖劇（オラトリウム）、聖劇曲である、聖なるドラマの戯曲である」

と、私はそう一言に答えたいのです。教えでも何でもありません。聖書は大きなドラマである。文学の上からいいにしても、ドラマというものは最高の形式でありまして、その点ではゲーテの『ファウスト』なんていうものは実に素晴らしいものです。



ところが、如何なるゲーテも、ダンテも、ミルトンも、いや藤井先生も、この聖書一卷には到底及ばない。聖書一卷から花咲いてきたところのいろいろなものであるに過ぎない。聖書がそれほど驚くべき書であるということに、みなクリスチャンも余り気がついていない。私たちは、一生かかってこれを読んで、決して読みすぎることがない。読み足りなくてしょうがない。私は願うことなら、エノクのように三百年生き長らえて、本当に福音を伝えたいと思います。

この幕屋もとにかく、創世記から大半は一応学んでまいりました。けれども、これは学ぶ毎に新しいのであつて、「2+2=4」というような、もう分つて決まっているというものじゃない。

「神は愛なり」

というが、神が愛であるということとは、観念ではない。その内容は実に無限なのです。また千差万態をもつて現われてくる。

今日は本当に珍しい復活節で、私は何か不思議に思います。実にいろいろな方がここに来ていらつしやる。どうぞ、わずかな時間ですけれども、この時を永遠の一瞬として、

「瞬間をつかまえるものは本当の人間である」

と『ファウスト』の中に書いてありますが、この瞬間を永遠の瞬間として、永遠の現在として、皆さんがこれをつかみ、

「ここに於いて何ものかにつかるのでなければ、去ることができない」

という背水の陣をもつて、皆さんは坐つていらつしやると私は思います。人生には、逃してはならない瞬間がある。それを逃すというと、なかなか次の瞬間が捉まえられないというような事態がある。

そういった気持で、すっかり自分の凝りを解いて、何かこわばった気持ではなくて、楽な気持で――ちょうどこの部屋はこうやって窓を開け放しています――そのようにあなた方の靈魂の扉を楽に開け放つて、このすがすがしい陽の光と、新鮮な大氣を入れてくれるように、皆さんの靈魂が何ものか新鮮なる者を迎える。そういった気持で臨んでいただきたいと思います。私も勿論、語りながらその気合です。語るも聴くも同じことでして、キリストの驚くべき現実に、一緒に入つて行こうというだけのことです。

●異次元的なものがぶつかってくる

では、ルカ伝の24章です。復活の記事は、マタイ伝でいうと28章、マルコ伝の16章、ルカ伝の24章、ヨハネ伝の20章、21章というのが並行していて、記事は様々ですが、今、私はその比較研究をするのではない。23章の56節からいきますと、

56……かくて誠命に遵いて、安息日を休みたり。

1 一週まわりはじめの初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。



ユダヤの安息日は、いうまでもなく土曜日に当たるので、土曜日の夕べから安息日が切れる。金曜の晩から土曜の晩に至る間は非常に厳格に安息日を守るわけです。「誠命に遵^{いましめ}いて」というのはそのことです。いろんなものを買に行ったり、いろんなことをするのを休んでいた。安息日が明けたので、女たちが香料や香油や何かを準備した。これはキリストの十字架から降ろされた亡骸^{なきがら}に、香油に香料を混ぜて、塗ろうというわけです。

一週の初の日、朝まだき――大体今でいえば5時から6時頃のことでしょう――女たちは備えたたる香料を携えて墓に行つた。マタイ伝28章に、

「さて安息日おわりて、一週の初の日のはの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて来りしに、

マグダラのマリヤというのは、罪を犯した、それからキリストに救われ、そして本当に靈魂が新しく展開した女性ですが、

2 視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を転^{まろば}し退^のけ、その上に坐したるなり。3 その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。4 守の者ども彼を懼^{おそ}れたれば、戦^{おの}きて死人の如くなりぬ。」(マタイ28・1〜4)

ローマの番兵がこれを番していたけれども、非常な異常なことが起きたわけです。そのことは今、ルカ伝には書いてないですが。

2 然るに石の既に墓より転^{まろば}し除^のけあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍^{しかばね}体を見ず、4 これが為に狼狽^{うろた}えおりしに、視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人^{かたわ}その傍らに立てり。

マルコ伝16章では、

「5 墓に入り、右の方に白き衣を著^きたる若者の坐するを見て甚^{いた}く驚く。」(マルコ16・5)

となっています。

5 女たち懼^{おそ}れて面^{おもて}を地に伏せたらば、

とてもこわくて、見ていられないので、面を地に伏せた。

一次元のものがあるとする。線ですね。そこに横から何か来た。これは二次元の世界です。そうしたらば、この一次元の直線的な存在は、自分の知らない次元から、何かぶつかって来たら、これは驚き懼れる。これ(黒板の面)は平面です、二次元は。今度は二次元のものが、三次元のもう一つ縦のデイメンション「次元」から降りてきたらば、ぶつかつたらば、この二次元の世界の者は驚き懼れる。私たちは三次元だか四次元だか知りませんが、我々の相対的な次元の中に、異次元的なものと高次元的なものがそこに臨んでくると、驚き懼れる。これは旧約聖書からみんなそのことが書いてある。

「驚^{おそ}く勿^なれ、懼^{おそ}るる勿^なれ」



と上から言ってくる。

「こわがるなよ、恐れるなよ」

と言って、ただ命令しているんじゃない。

「何も恐いことはない、恐れることはない、もつと素晴らしい世界に入れてやる。

もつと素晴らしい現実、お前たちを現実のものにしてやるよ」

と。私たち、三次元だか四次元だか知らないけれども、死を恐れている。普段は意識していません。今、ガタガタッと大地震があつたら、皆さん、この家がつぶれそうになったら、我々は庭に出る。これは、我々は普段意識してないところの意識がその時にのぼってきて、死を恐れ、生を得ようとする。死を恐れて生を得ようというのは根源衝動です。これは生きとし生ける者の根源衝動です。生きとし生ける者の根源衝動が意識の奥にありますから、それが何かにぶつかると、そいつが意識にのぼってきて、もう我さきに、普段偉そうなことを言っている、われ先に、私なんかなるかも知れない。そういう異次元的なものがぶつかってくると、何か特別なものが起きるといって、私たちは根源意識が恐れたりまた求めたりする。

この場合はみんな恐れおののく。マリヤでもそうです。キリストの誕生の時、恐れ戦いたけれども聖霊が、

「懼るるなかれ、恵まれたる者よ」

と言われた。実は、この聖書の世界は、みんな私たちはいわゆる死に向かつての存在である、死への病を持っている。けれども、

「その死への病から解き放ち、本当の生命の世界に入れてやろう」

というのが、この聖書の音信なんです。キリストがヨハネ伝5章39節で言っておられる。

「汝らは聖書に永遠の生命ありと思ひて之を査ぶあかし、されどこの聖書は我につき証するものなり」

お前たちは聖書において――勿論、この場合は旧約聖書のことです。いわんや新約聖書はそうです――永遠の生命のことをしらべているが、「永遠の生命はどうか、こうか」と言つて一生懸命にやっている。キリストに、

「永遠の生命を得るにはどうしたらいいですか」

と、青年が聞いて来たじゃないですか。ところが、

「聖書は我につきて証するものなり」

聖書は我につきて証するもの、永遠の生命を調べているが、聖書は我につきて証するものなりと。

「キリストは即ち永遠の生命である」

ということがその言葉でもハッキリわかる。



●永遠の生命を得る

即ち我々は生命を求めている。20世紀の最後の問題は、「生命とは何ぞや」という問題です。原子核の物理学の時代になってきても、まだ「生命とは何ぞや」という問題は解かれていない。これを科学的に説明できるかどうか知らない。あるいは、それを説明してみたところで、それでどうというものでは、私はなかりうと思う。

実は本当の生命というものは、既に証^{あかし}せられてあつた。即ち、聖書において証^{あかし}されていた。一番求めて、誰もかれもが実は、本当に一番求めているものを、みんなそっちのけにして、第二、第三、第四、第五と、いろんなものを求めている。やれ学問だ、やれ健康だ、やれ富だ、やれ地位だ、なんだかんだというわけです。人間の文化の、文化的に生み出す一切のものは、その求めている対象になっているんですが、それを百数えても、一万数えても出てこない。永遠の生命はそこにはない。もしあるならば、

「私はプラトーンに行つて永遠の生命を得ました。私は孔子に行つて永遠の生命を得ました。私はベートーヴェンに行つて永遠の生命を得ました。私はレンブラン

トに行つて永遠の生命を得ました」

という人がありますか。一人もいない。永遠の生命は、キリストに來なければ得られない。事実が証明する。それを拒んでも、それはご勝手です。拒んで、それで永遠の生命があるということが言えるかどうか、自分でやつてみたい。問題は、議論じゃない。事実なんです。事実が決するのであつて、議論が決するのではない。いくら議論して、どんなに世界中の偉い人が議論して、神があるとかないとか言つてみたところで、その結論は「神はある」ということになったからといって、それで安心というわけにはいかん。結論が出した有神論なんてものは何も力がない。結論が出した無神論もどうにもならん。多神論も何もかもどうにもならん。これは私たちがどんなにがいても、その自分の次元からは出ることができない。地球上からどんなに――それは近頃は原子力でもつて外へ出ることができるようになるんだかどうか知りませんが――どんなに私たちががいても、石を放つてもこれは地球に落つこちてくる、世界内、限界内のことであります。

聖書の現実是我々の相対的な現実、死によつて限定されている現実、

「一切のすべての人は死ぬべき者である」

と、ドイツ語の教科書にすぐ出てきます。死によつて限定されているその限定を突破させるところの現実を、聖書は与える。

聖書とは何か。死によつて限定されているところの、我々の現実を突破せしめるところの、驚くべき現実を開示し、死の現実に対して本当の生の現実をもつて臨んで来ている、驚くべきドラマが、これが聖書なのです。この立体的な異次元なもの、絶対異次元な世界から臨んできたところの――私は絶対次元と言いたい――この世界に入れるということが救いなんです。神様は何とかして、



「この世界、こんな素晴らしい世界を私は持っているんだが、みんなを本当にこれに入れてやろう」

というのに、人間は、

「それは要りません、要りません」

と言っている。本当は根源的に生を求めているくせに、「要りません、要りません」とはどいうことでしょうか。人類の歴史は、カイン、アベルのあの兄弟の殺人から始まって、殺人に終る。なんという恐ろしい歴史でしょう。

原子核実験じゃない。そういった考えは根本的に引っくり返さなければダメです、実験に制限を与えてみたところで。人間の一切の問題はこの靈魂の問題に帰結する。私は、世界の歴史の動きを新聞で垣間見ても、また日常の生活で電車の中で人々の様子を見ても、そこには望みがない。人間の世界からは望みが来ない。どんなローマン主義もまた理想主義も、人間の世界からは望みが来ない。それは絶望的です。それはニヒリズムが本当です。

●説教ではなく告白

けれども、この伝道の書の始めの方にこういうことが書いてある。

「²伝道者^い言^わく空^{くう}の空^{くう}の空^{くう}なる哉^{すべ}都^{すべ}て空^{くう}なり

と。聖書にそんなこともある。全ては空である。全ては“Nichts”〔無〕である。“nothing”である。ニヒリズムの人は非常に喜びそうな言葉です。

³日の下に人の労して為^なすところの諸^{もろ}の動作^{はたらき}はその身に何の益^{えき}あらん⁴世は去^さり世は来^{きた}る地^ちは永久^{とこしなえ}に長存^{たもつ}なり⁵日は出^いで日は入^いりまたその出^いし処^{ところ}に喘^{あえ}ぎゆくなり⁶風は南に行き又^{また}転^{まわ}りて北にむかい旋^{めぐ}転^りに旋^{めぐ}りて行き風復^{また}その旋^{めぐ}転^りの処^{ところ}にかえる。⁷河はみな海に流れ入る海は盈^みること無し河はその出^いきたれる処^{ところ}に復^{また}還^{かえ}りゆくなり⁸万^{よろず}の物は労苦^{らうこ}す人これを言^いいつくすことあたわず⁹目は見るに飽^あくことなく耳は聞^きくに充^みること無し¹⁰曩^{さき}に有^ありし者はまた後^{のち}にあるべし曩^{さき}に成^なりし事はまた後に成^なるべし日の下には新しき者あらざるなり」(伝道1・2・9)

日の下に新しき者あらざるなり。「パンタレイ」「一切は流^る転^{てん}する」という。

「ああ、仕方がない、もうそれ位にしてあきらめよう」

と、日本人は諦^{あきら}める。

「まあ、面白おかしくやっていこう。どうせ墓場だから」

というのが浅い「瞬間現実主義」だ。人間のいろいろな考えや在り方というものが聖書の中にみんな暴露されてある。なんにも隠してない。その通りだよと、聖書は言っている。

「その通りだよ、どれもこれもみんなそれぞれ、一面の真理はあるよ。けれども、それが本当に究極のものでは絶対でない。それらの真相、真理というものを、驚



くべき次元から来るところの光をもつて、これを変質変貌させてしまおうとするのが、この聖書の救いの世界だ」

と。もうそうなつてきますと、どんな思想にぶつかりましても、どんな現実にもぶつかっても、パウロが言つたように、

「我れ一切の秘訣を得たり」

ということになる。

「あれは真理でないから、あんなものには目をふさいでおこう」

なんていう、そんな狭いんじゃない。

「なんでも来てみる。すべてを位置づけ、すべてを限定づけ、そして暗き者は光に変えてやる。曲がつた者は直くしてやる。冷たい者は暖かくしてやる。そういう

次元にお前たちを入れてやろう」

というのがこの聖書の世界です。私はお説教は大嫌いです。皆さんと一緒に本当に聖書の真理の前に頭を下げて告白している。

そういう本当の生というものを、生命というものを与えんとしてやって来たのがキリストであつた。そして、それが今あるひとつの瞬間、十字架を通つてキリストが甦えることは、彼が予言しておられた。皆、それを聞いていた。にもかかわらず、彼らはこれを受けとらない。いいですか、私たちが受けとらないんじゃないですよ。その頃、じかじかにこのキリストを目で見て、耳で聞いた連中が、イエスが約束していたその言葉を受けとらない。況んや私たちが受けとらないんです。

そういう人間というものは本当に神のその世界に霊盲である。目が盲しいている。耳が聾ろうしている。だから、このイザヤ書において言っているじゃないですか。

「これは普通の目の見えない人や、耳の聞こえない人のために言っているのだ」

なんて思っていたら大間違いです。それもそうでしょう。けれども、もつと大事なことは、私たちが一人ひとりに言っているんです。

「そのとき盲者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べし。そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、唾者の舌はうたわたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり」

イザヤ書35章という有名な終末的な予言をしているところです。私たちが盲目であり、私たちが聾者であり、私たちが跛者である、ということですよ。

皆さん、体で聴いているんですよ！ 頭で聞いているはダメですよ。他人ひとごとでない。

●暗黒の四位一体からの解放

キリストが予言された通り甦しかばねえられた。

3 内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4 これが為ために狼狽うろたえおりに、



「あ、これは本当に復活なさった!」

といって欣喜雀躍するかと思つたらば、狼狽^{うろた}えていた。これは次元がまだ乗り越えられていないから、当然なんです。私たちもうろたえる。次元が乗り越えられるまでは、うろたえるんです、疑うんです、拒むんです。

視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人その傍^{かたわ}らに立てり。⁵女たち懼^{おそ}れて面を地に伏せたれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。』

「なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」

とね。キリストは死んでも死なないんです、絶対に。彼は神の子であるからといって、ただ神話的に言うんじゃない。

⁶彼は此処^{いま}に在^あらず、甦^{よみが}えり給えり。

「よみがえる」というのは「陰府^{よみ}から帰る」ということ。日本語ではそうです。死を通った。罪を、我々の罪を着た。私たちが神と直結できず、神の聖意^{みこころ}を本当に自分の意^{こころ}とすることができない。これがアダム、イブの樂園喪失であった。

神の意を意として受けとつて、「はい!」と言うことができない。

「それでも…、こうである、ああである」

と言って、「それでも」と言つて反抗するのが人間のエゴイズムです。自己中心というやつです。「自主」といえば結構な言葉です。けれども、本当の自主ということは、神という絶対者に絶対に依存することだけが本当に自主なんです。神に対して本当に「はい!」と言うことのできない存在は絶対にこの世界に來れない。

ところが、神に対して「はい!」ということと言える人は全世界に一人もいない。

「義人なし、一人だになし」

とはそのことです。神様に対して「はい!」と言うことが即ち「義」なんです。正義ではない。我々の靈魂^{たましい}の角度が神に対して、神の意志に対して100%に自分を投げ出して「はい!」と言っているか。それが本当の「義」という。それを貫き通して全うしたのがナザレのイエス・キリスト唯一人。だから、パウロが

「義人なし、一人だになし」

と言った。

パウロは自分は大いに義人だと思つていた。モーセの十誡はよく拳々服膺^{けんけんふくよう}しているし、もう実に誰が見ても、

「ああ、パウロは立派な人だ」

と。パリサイ人^{びと}中のパリサイ人です。ところが、これは神の義を本当に受けとらず、己の義を以て置き換え、神の真理^{まこと}を私^{わたし}していた。この「私する」ということが、どんなにその内容が善きものであつても、それを私している限りは、それが「罪」ということ。何か間



違ったことが罪ではない。一番立派そうに見えるところに、一番恐ろしい罪がある。私たちは、如何なる事態も絶対に、この真理は神のものである。私してはいかん。

その本当の義を生きたのはキリストです。我々は不義である。神に対して「はい」と言えない。今の若い方には一番難しいことかも知れない。みんな自分の、なかなか意見を持つていらつしやる。結構です。結構ですが、どうか、神様の前に本当に砕けた人になっていただきたい。

この不義即ち罪とは、「我」という罪です。私の「この罪、かの罪」ではない。「我」という我を立てているのが罪。またそれが故に、私たちは死に限定されている。そうして私たちは、死の行く先は陰府、地獄である。そいつを続べ治めているのがサタンとやつです。「罪と死と地獄とサタン」これを四位一体と私は言っておりますが、暗黒の四位一体です。

「この暗黒の四位一体の世界からお前たちを解放してやる」

というのがキリストの救いではないですか。「よみがえる」というのは、そのような罪を罪とし、死を死とし、陰府を陰府として、つぶさにキリストはそれを背負ってしまった。けれども勿論、サタンのとりこにはならん。

「陰府にまで降り」

なんて書いてありますが。その霊界のどん底を潜った。彼は本当に私たちのこの四位一体的な事態を全部、自分が背負ってしまった、サタンに一応は、十字架を負ってサタンに敗けたような相です。しかし、神の子は絶対にサタンに敗けない。いきなり天界に入ろうと思えば勿論できた。

「天の十二軍を今呼び寄せることができないと思うか」

と、キリスト自身言われたでしょ。できるんです。できるけれども、それは聖意ではなかった。キリストは霊力を私しない。霊の力を私しない。神様の聖意によって、神の霊なる聖意にただ従っていた。

聖意を100%に受けることだけが彼の自由という。彼の自主というのはその自主です。その自由ですから、これは絶対の自主であり、絶対の自由なんです。神における自由です。

よく普通、我々近代人が「自由、自由」と言うが、これは「神の」「キリストの」を抜かしてしまつて、自分の側に持つてきて、自由なんて言つたつて、そんな自由は不自由でしょうがない。それはとんでもない不自由なんです。その不自由であることを知らない。そんな自由をやっているから、しょっちゅう喧嘩ばかりしている。

私たち自身がどうにも始末がつかないんです、この「罪、死」というやつは。どうにも始末がつかない。これは同じ次元の中でどうにかありませんか、どうにもならん。これに別な次元からやつてきて、これをその次元から引き出す。また、その次元の中に異次元的な絶対次元のものが浸透してきたんです。いいですか。キリストの降臨とは、私たちの普通の現実の中に、普通の相対的な現実の中に、驚くべき絶対現実が切り込んできた。入っ



てきて、そいつを溶かしてしまふんです。ただ「いかん！」といって横に除けるのではない。

「私たちは潔い、あれは穢ない」

なんて言って審くのは、これはパリサイという。キリストは決してそんなことはなさらない。どんな穢ないところにも、どんな曲がつたところにも、樂に行かれる。そしてそれを直してしまふ。暖めてしまふ。光に変えてしまふ。その本当の現実がここに降^{くだ}ってきたということなんです。そうして、降^{くだ}ってきて、私たちをこの現実からやがて引き上げていく。そしてまた、本当の新天地がこの全世界に展開する時を聖書が約束している。

そういう現実に入ってきたら、いわゆるお釈迦さんの世界でも言うじゃないですか、

「娑婆^{しやば}が即ち極楽浄土である」

というようにことを。私たちのこの罪の世において即ち天国が来る。

「天国は汝らのうちにあり、間にあり」

と言われたのはそのことじゃないですか。

●靈魂の引っくり返り

とにかく、

6 彼は此處^{ここ}に在^{いま}さず、甦^{よみがえ}り給^{たま}へり。

陰府から帰って本当の現実にはキリストは戻って来られた。死の様相^{さま}から生に。

「死に於て死に打ち勝つ」

というように言い方が、他のパウロの書簡の中にありましたが、キリストの中には神様の生命^{みなぎ}が漲^{みなぎ}っていた。別な言葉でいうと、靈核^{れいかく}が、靈の核がやってきて、神の靈核が来て、相対的な私たちの体において生命の核分裂をそこで始めさせて、私たちの中に何かしらんが別な生命力が、この靈核というものが働きたし動きだして、そういった核分裂を完全に起こして生きていたようなのが、このキリストです。キリストは神における原始力であるところの、神の原始の力を彼の生命として展開していたような人です。

だから、湖の上を渉^{わた}りますよ、大丈夫、渡ります。波を静めますよ。それは神の靈とその聖意に従って。これはもう自由です。この福音書の各ページに現代医学が到底及ばないようなことをやってのけている。

あのアレクシス・カレルという人が『人間この未知なるもの』〔註：アレクシス・カレル（1873～1944）はフランスの外科医、解剖学者、生物学者。1912年にノーベル生理学・医学賞を受賞した。人間の可能性とその未来を生理学的・哲学的に考察する。初版発行：1935年〕の中で、

「謙虚な気持をもって、そういったことに対して医学がもつと目を開かなくてはいいかん」

ということを言ってます。我々の全ての営みの奥には、実は我々自身が自覚しないところの、そういった靈的な働きがある。みんな来ているんです、神の恩寵は全ての人に来ていて。



神を信じなからうが、唯物論者であろうが、なんであろうが、みんなその働きはある程度来ている。それを知らないでいるだけ。また、それを拒んでいるだけです。それはキリストの言葉をみてもわかるでしょ。

「直^{なお}き者にも直^{なお}からざる者にも雨を降らせ、陽^ひを照らし給う。これ父の本当の愛である。お前たちもそのように全^{まった}かれ」
と。そのように全かれという。

「一切のものに対して、お前たちを通して現われるところのキリストの光、愛、生命というものを展開してごらん。それが本当の全きという角度なんだよ」
というのが、キリストがあそこで言わんとしていらっしやることなんです。

尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶い出でよ。⁷即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付^{わた}され、十字架につけられ、かつ3日めに甦^{すべ}るべし」と言い給えり」⁸ここに彼らその御言を憶い出で、⁹墓より帰りて、凡^{すべ}て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰この女たちはマダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。¹¹使徒たちは其の言を妄^{たわごと}語^{こと}と
思^{おも}いて信^{しん}ぜず。

使徒たちは「何を言っているか!？」と言つて信じない。大体、まだ女性の方がいいですが、男性というのはやっかいなものでして、なかなか信じない。大体どこの集会でも女性の方が少し多いようですが、女性の方は日本では――なにも大言することはないけれども――その生涯を通して本当に一人、二人、三人と、懇ろなる言葉をもつて、実存をもつて身証し、第二の国民に本当に福音を、福音の種を播いていく。その使命を荷^{にな}っているのは、実は女性であるかも知れない。ベルジャエフがちよつとそんなようなことも言っていました。世はもう末になってきたからと。

「妄^{たわごと}語^{こと}と思^{おも}いて信^{しん}ぜず」

と。それは使徒ですよ、皆さん。使徒たちがこれを妄^{たわごと}語^{こと}と思^{おも}いて信^{しん}ぜずと。キリストから散々聞いていながら、ペテロですら、

「あなたは神の子、キリストです」

なんて、カイザリア・ピリポで偉そうに証言しましたが、大いにキリストに喜ばれたけれども、その次の瞬間には、

「まあ、先生、十字架にかかることは止めてもらいたい」
と言つたら、

「サタンよ、退け!」

と言つて叱られた。

「私が十字架に昇らないで、どうして救いが来るか!」



というわけです。旧約聖書は、この旧約のイスラエルの宗教は長い歴史を通して預言していたことのものは何か。単なる動物の^{こひつじいけにえ}羔の犠牲ではない。罪なき、本当に神の生命を生命とし、義を義とし、愛を愛とし――義と愛とは同じことですよ――そのキリストが罪の贖い^{あがな}をするまでは、ここに救いが来ない。そのことをイエスはあのイザヤ書53章のあたりを本当に身を以て受けとられた。

我々はキリストを十字架にかけた。その当時の使徒たちも、とうとう十字架までは従い得ない。一番正当な、

「俺たちは一番正当なるオーソドックスである」

と考えているところの祭司、長老、学者、教法師というような連中は、

「イエスは異端者である、新興宗教である」

といて、イエスを除^のけ者にしようと思つて一生懸命にやった。ところが、キリストとの問答を見てごらんさい。ケタ違いですから。民衆はキリストの恩寵にあずかっていたから、いろいろの病を癒されたり、罪をゆるされたり、いろいろされていましたから、大いに民衆は喜んでいたけれども、最後のドタン場に来てから、やっぱり煽動されて、キリストを十字架にかける手先になってしまった。

ただ独りです、イエスは唯ひとりです。当然、ただ独りです。本当に異次元を生きていた人はこの一人しかない。せつかく使徒たちとは問答をし、御飯も一緒に食べたけれども、次元が違ふんです、次元が。

「なんとかしてこの次元を〔与えたい〕」

と、キリストが思われるけれども、どうにもならん。時には、その次元の世界に入れてやりますよ、キリストは。恵みをもつて。けれども、根源的には入れない。

なんとすれば、この罪というやつが、靈魂が本当に引っくり返っていないからです。引っくり返っていないから。この靈魂の引っくり返りを――皆さん、私が「靈魂の引っくり返り」なんて言うのと、笑う人があるかも知れないけれども――パウロ先生が一番よくこれを現わしている。使徒行伝の9章、22章、26章をよく読んでください。あの立派なパウロが――それ自身は相対的にはまことに立派なんです、どこも悪くないけれども――イエスを信じている者を迫害し始めた。

「あいつらは、けしからん。あの異端をやつつけてしまえ」

と。これはいわゆる宗教的な争い、宗派争いのことをパウロもやった。その急先鋒となつてやった。それは、「自分たちの信仰は」と言つて、固まっているような信仰はダメなんです。そういう信仰じゃないんだよ。己の熱心というようなものじゃない。パウロに、

「この男は一生懸命だが、その一生懸命の角度がまるつきり反対だ。これを180度に角度を変えてやろう」

といて、顕^{あらわ}現れて来たのが復活のキリストです。



「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

と、驚くべき次元からキリストが顛れて来たから、サウロはそこですつ倒されてしまった。正直、目が見えなくなった。ものが言えない。食べられない。アナニヤにやつと御霊の按手をされて、彼は眼が開けた、開眼した。

「眼より鱗のごときもの落ちたり」

と彼自身が告白しています。本当に心眼が開かれた。

「俺は間違っていた！」

と。今まで真つ向からキリストに反対してた者が、最もすごいキリストの使徒となって働き始めた。それ自身はどんなに熱心であつても、どんなに良きそうであつても、どうにもならない事態に対して、本当のものが与えられるというのがこの世界です。ただ、

「神様はひとり。キリストは十字架にかかって復活して……」

なんていう命題を信じているのではない。命題は、いくら信じたつてどうにもならん。受けとらなくては、身をもつて。皆さん、瞑想しながら聴いていますか。

「私は今日、この次元から次の次元に入るんだ。私は入ります！」

という、今、現実には私たちは今、直面しつつあるんです。

●イエス自ら近づきて

そこで、ルカ伝の先へ行きます。

¹³ 視よ、この日

というのは復活の朝です。

二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオという村に往きつ
つ、¹⁴ 凡て有りし事どもを互に語りあう。

キリストのゴルゴタの十字架のことですよ。

¹⁵ 語りかつ論じあう程に、

男だからすぐ論ずる。論じあう、どうだこうだと。

イエス自ら近づきて共に往き給う。¹⁶ されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。¹⁷ イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、¹⁸ その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う

私は今日、ある一つの大事なことを皆さんと共に学びたい。それは、

「イエス自ら近づきて共に往き給う」

という一節です。イエス自ら近づきて共に往き給う。キリストが近づいて来たんです。皆さん、人生のこの旅路において、幾度、キリストが近づいて来たでしょう。それを知らない。また逃げている。私はある時は、



「今度の集会には来なさいよ」

と言う。私はそんなことは言いたくない。人の自由を束縛したくはない。けれども、止むに止まれずして言うようなことがあります。それでも、

「こうで、ああで……〔集会に行けません〕」

と何か理由を言つて、来ないことがよくある。永遠の瞬間を逃す^{のが}。

ミッション・スクールにいる人は、学校でキリスト教のことを教わる。牧師さんは何をおっしゃるか知りませんが、キリストはとにかく近づいておられるんです。けれども、そのイエスが本当に近づいて、そして語ろうとしていらつしやるのに、手をとろうとしていらつしやるのに、その手を振り払い、その言葉を拒む、というのがミッション・スクールの事態かも知れない。キリストはいろいろな姿をもつて近づいて来ます。それは病人であるかも知れない。それが友人であるかも知れない。いろいろな姿をもつて、いろいろな機会に、キリストは近づいておられる。このキリストの近づきに、

「されど彼らの目遮られて」

と書いてある。霊盲である。霊的に目が盲^{しい}ている。また霊的に耳が聴こえないでいる。

人類の歴史を通してキリストは近づきつつあった。アブラハムを通してキリストは近づきつつあった。そうですよ、皆さん。私は何か方程式のような神学を言っているのでも何でもない。事実なんですよ。岩から水が迸り出た時に、

「この岩はキリストなり」

とパウロは言つたじゃないですか。その岩を通してキリストの恵みが現われている事態です。「岩がキリスト」なんて、ただ方程式で言っているんじゃない。アブラハム、イサク、ヤコブ、エリヤ、アモス以下の預言者たち。彼らにみなキリストは近づいて来た。

「我はアブラハムより前に在りしなり」

と。「私はアブラハムより前に在った。神と共に永遠の前より在った」という。

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と^{とも}偕にあり、言は神なりき」

と。言は神と偕にあり。神と近くにありました。この言に光があつた。この言は世の光であつた。その光は世に現われた。けれども、世はこれを受けなかった。その光は即ちナザレのイエスであつた。彼はこの地上にあらわれて来た。天界のキリストは地上にイエスとして現われて来た。本当に近づいたのです。

本当に近づいた。パリサイ人の家にもキリストは行かれた。遊び女^めともキリストは共にされた。みんなキリストは如何なる人にも隔てなく近づいた。けれども、拒む人は拒んだ。

「本当に、ああ私は間違っていた」

と言つて、そこに平伏^{ひれふ}す人は、本当にキリストの近づきをそこに目をもつて見、耳をもつて聴くことになる。だから、

「聴く耳ある者は聴くべし」



とキリストが言われた。

●受肉とは神の近づき

「イエスの受肉」とは即ち、神がこのキリスト・イエスにおいて私たちに近づいて来たことなんです。

「エホバの神はいと高きところに住まい」

「いと高き」というのは、仕方がないから空間的に言いますよ。

「霊界の、天界のいと高きところに在って、また低きところにも住み」

と、イザヤ書57章15節にあるでしょ。

「^{いと高き}至高^{いと下}く至上^{とこしえ}なる永遠にすめるもの聖者と^{かく}なづくるもの如^{かく}此^{かく}いい給う我はたかき所きよき所にすみ亦こころ砕けてへりくだる者とともにすみ謙^{へりく}だるものの霊をいかし砕けたるものの心をいかす」(イザヤ57・15)

キリストは私たちの中に、間に、側^{そば}に、近く来て下さった。「受肉」とは即ち神の近づきであつた。

「汝ら悔い改めよ、天国は近づけり」

ではないですか。「悔い改めよ」とは、心を転換しなさい、方向^{むき}を変えなさい、自分が見ていたその目を神に向けなさい、キリストに向けなさいということ。

「天国は近づいた」

と。キリストは空言を言っているのではない。彼自身が即ち天国の中心です。彼自身が即ち天国体です。この天国体が事実、今そこに来たんだからキリストは、

「天国を持つている私が来たじゃないか、さあ、私を受けなさい」

というんです。

それでは、そのキリストに私たちは一体どのようにしてお目にかかれましょうか。

「聖書は我^{あかし}につきて証^{あかし}するものなり」

「聖書に來なさい」

という。聖書はただ本だなんて思ったら間違いですよ。これはただの本ではない。

「聖書は研究すべきものである」

なんて、そうじゃない。聖書はいくら研究したって、生命^{いのち}は来ない。この中から発しているところの呻きと叫びとその声を、そこから滲^{にじ}み出ているところの、迸^{ほとばし}り出ているところの生命を受けとる。それが即ちキリストです。何処を開いてもその究極のところはキリストにぶつかる。

「ああキリストがここに隠れておられた、キリストがこんなに近づいておられた」

と。アウグスティヌスがどうにも仕様がなかった時に、彼は本当にもう自分が行き詰まって泣いていた。そうしたら、



「トレレゲ、トレレゲ」（取りて読め、取りて読め）

という、子供が歌をうたっている声を聞いた。それで、聖書を開いてみたら、ローマ書13章のところが開かれて、彼はそこを読んで回心したではないですか。彼はコンバーションを起こしたではないですか。即ち、彼アウグステイヌスはローマ書においてキリストにぶつかった。

「キリストを衣よ^ぎ」

と書いてある。それで、このアウグステイヌスは己の過去の罪を脱ぎ棄てまして、キリストを衣た。ローマ書13章11節に、

「¹¹汝ら時を知る故に、いよいよ^{しか}然なすべし。今は眠^{ねむり}より覚^さむべき時なり。

そうですよ、皆さん、私たちは今、眠りより覚めるべき時なりです。

始めて信ぜし時よりも今は我らの救^{すくい}近ければなり。

終末は近いですよ。

¹²夜ふけて日近づきぬ、

人類の歴史は今、暗黒時代です。

然れば我ら暗黒^{くらき}の業^{わざ}をすてて光明^{ひかり}の甲^{よろい}を著^きるべし。¹³昼のごとく正しく歩みて宴^{えん}楽・酔^{すい}酒に、淫^{あらそい}楽・好色に、争^{あらそい}闘・嫉妬^{ねたみ}に歩むべきに非ず。

「あれがああした、これがこうした」と、何を言っていますかと。私たちは人間的な問題をどんなに計量したって、何も出てこない。一切を投げ棄てて、自己を乗り越えて、このキリストに――「正しく歩みて」というのは、キリストにまっしぐらに――向かって歩くことです。

¹⁴ただ汝ら主イエス・キリストを衣^ぎよ、肉の慾のために備^{そなえ}すな。」（ローマ

13・11～14）

「主イエス・キリストを衣^ぎよ」

と。これがアウグステイヌスがぶつかったキリストであった。

●私たちの後からキリストは近づいている

私たちの後からキリストは近づいています、このエマオ途上の人たちに近づいて来られたように。

¹⁶されど彼らの目遮^さえられて、イエスたるを認^こむること能^よわず。¹⁷イエス彼ら

に言い給^{たま}う『なんじら歩みつつ互に語りあ^{こと}う言は何ぞや』

「何を語っているかね」と。キリストは知っていますよ。知っているけれども、こういうように聞かれた。いわゆる、しらばつくれたんじゃない。キリストは、あるひとつの深い故^{ゆえ}があつて、こういうように問われた。

かれら悲しげなる状^{さま}にて立ち止^{とどま}り、¹⁸その一人なるクレオパと名づくるもの



答えて言う『なんじエルサレムに寓^{やど}り居て、独^{ひと}り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』

「この頃、あのキリストが十字架にかかった事態をお前さんは知らないのか。とんでもない話だねえ」

とまあいうわけです。「悲しげなる状^{さま}」というのは、悄然^{しょうぜん}として、

「実は、自分たちは、キリストはメシヤだと思った」

と書いてあるでしょ、あとの方に。ところがこれは十字架にかかってしまっただうにもならん。ユダヤの理想では、全世界を統^すべ治めるところの王者が現われて来て、神政を施してユダヤ中心にそういつた国が地上に来るという、神政、祭政一致的な王国を夢見ていた。預言者たちの角度も皆その角度が大いにあるわけです。しかし、キリストは違うんです、キリストの王国は。

「わが国はこの世のものにあらず」

と。この世のものでないから――この世を放っておくじゃない――この世よりもっと素晴らしい次元の王国だから、この世もすっかりその中に包んでしまう。直線的にただこの世の王国だなんていつてるんじゃない、というわけなんです。とにかく、そういつた自分たちのいわゆる預言における、その当時の一般の考えにおける「理想的なメシヤ」という者は、キリストとは食い違っていた。だから、悲観していたわけでしょう。

「みんなが知ってるのに、独りお前さんだけこの頃起こったことを知らないな」とこういうわけです。

イエス言い給う、

「どんな事だね？」大分しらばつくてますが、「どんなことが起こったかね」と。

「19 イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、あのナザレのイエスのことですよ』と。

彼は神と凡ての民との前にて、業^{わざ}にも言^{ことば}にも能力^{ちから}ある預言者なりしに、業^{わざ}にも言^{ことば}にも能力^{ちから}ある預言者」、正にそうです。

「我が言は霊なり、生命なり」

「単なる教えじゃないよ、霊であり、生命である」

と。それ自体に驚くべき迫力を持っている。それでその業がケタ違いです。預言者たちが到底なし得なかったところの、ものすごい事を彼は証している。これは御利益ではないですよ、皆さん。これは神様の栄光が彼を通して自由に現われておられた。

20 祭司長ら及び我が司^{つかさ}らは、死罪に定めんとて之^をを付^つし遂に十字架につけた

り。21 我らはイスラエルを贖^{あがな}うべき者は、

政治的にも、また宗教的にもすっかり救って下さる、神政、祭政一致の王国を出現するよ
うな人は――それが「贖^{あがな}うべき者」という意味です。



21我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然しかのみならず、此の事の有りしより今日ははや三日めなるが、

三日たったらもう絶望ということ、三日経ったらもうお終いということなんで、「もう三日である」と。

22なお我等のうちの或女あるたち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝

「朝」というのは今日、今朝、

夙はやく墓に往きたるに、23屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。24我らの朋輩ともがらの数人も

というのは、他の弟子たちでしよう、男ですね、これは。

また墓に往ゆきて見れば、正ただしく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』

女たちが言った通り、それは墓にはいなかったけれども、それではイエスに会ったかという、会わない。だから、ちよつとこれはおかしいと。疑い、また悲観し、悲しんでいたと、こういったような調子です。

25イエス言い給う『ああ愚おろかにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍おろき者よ。26キリストは必ず此らの苦難くるしみを受けて、其の栄光に入るべきならずや』

「此らの苦難くるしみ」、十字架を受けて――十字架の前にさんざん迫害されました。そして、十字架にかかり――「栄光に入る」というのは天界に入ることです。復活して、昇天、神の右に坐する凡ての事態を「栄光に入る」と言います。その栄光に入るべきじゃないかと。

27かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就つきて凡ての聖書しるに録したる所を説き示したもう。

モーセの五書からまた預言書に、キリストはここで自由に語り始められたんですね。素晴らしいことですよ、これは。復活のキリストが現われて、このように問答をして、

「なんですか？　どんなことかね？」

と聞いた人が逆に、

「一体、あなた方は何を考えているか。何をまた悲しんでいるか、何を論じているか」

と言って、キリストは一面あきれられているわけですよ。あきれられているけれども、この人たちに本当にこの事態を知らせてやろう、この二人の旅人の目を開けてやろう、開眼させてやろうという気持で――キリストはいきなりものを言わん――「なんだね？」といって、問いかかつて来て、彼らをずうつとその場に誘導していくような深い愛の気持から自然に起きてくるわけです。

●「共に」から「中へ」

この間、水戸からの帰りに、私の隣にある青年が坐っていた。本を読んでいたから、



「まあ、ミカンをおあがんなさいよ」

と（私は持っていたから）、大分暑かったからね。いろいろお話しているうちに、私はなにもしれど思っていたいなかったけれども、だんだん話しているうちに、上野に着く時にはもう私はちゃんと一席、キリスト教をやってしまった。非常にその青年は喜んで、もう私の名前を正に聞かんとするくらいの気持ちにまでなっていたけれども――私は勿論言いませんでしたけれども――

「大変、今日は本を読むよりかも、とても今日はよかった」

と言って、本当に喜んでわかったです。これは早稲田大を卒業したある青年でしたが、私も名前は知りません。

そのようなわけで、自然にキリストは勿論、この二人に近づいて来られた。そうして、この人の眼を開いてやろうと、「証し人とせん」という、深い愛のしぐさであった。それで、「かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ」といつて、みんな語られて、

²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、

キリストはまだどんどん進んでいらつしやる。けれども、お話は非常にはずんでいるものですから、足の方はきつとろかつたのでしょね、大した距離でもないのもう夕方になった。

²⁹強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』

もう日が傾きました。この二人もはじめは、

「この人はあのイエスのことを知らないのか」

といつて反問したところが、どっこい、知らないどころじゃない。このイエスほど知っている人はない。このキリストの話にすっかり彼らの靈魂はとらえられてしまったから、

「止めて言う『我らと共に留まれ』」

と。「留まれ」は「メノウ」という字で「留まってください、宿ってください」ということ。

キリストが近づいて来た。この近づいて来たキリスト、共に歩いて来たキリストに今度は、

「宿ってください」

と言った。“bei(バイ)”[共に]が“in”[の中に]になる。

「神、われらと共に」

ですね。

「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野に

ふさせ、いこいの水浜みぎわにともないたもう。……たとい我死のかげの谷をあゆ

むとも、禍害わざわいをおそれじ。汝、我とともに在いませばなり」(詩篇23篇)

これは旧約の世界です。キリストは近づいて来た。近づいて来たが、さあ、この近づきを本当に受けとるのは、どうやって受けとるかというのと、キリストを中うちに入れなければ、この近づきが本当に受けとれない、近づきだけじゃ。この近づきのキリストというものは



たくさんあります。けれども、

「この中に入って宿ってください!」

という、この「中に入って宿ってください」という、キリスト教が、福音が今や大変薄らんでしまった。イエスはこの愛を以て迫って来たらば、とうとう彼らは、

「さあ、私たちの家へ来てくださいよ」

と。これですよ。これは既に彼らの気持が開けて来た。

●無信・絶信

私はこの間、晴嵐荘に行きました、勝山君に導かれて。私はそんなに行くつもりでもなかったんだけど。あそこには無教会のなかなかの群がいる。

「ああ、小池という人が来た。あれはちよつと危険だから
危険だかなんだか知りませんよ、こっちは、

とにかく、あれは聞かない方がいい」

というので大部分は来ない。ところが、幾人かの人が、まあ好奇心が何か知りませんが、始めは妙な気持で聞いていた。ところが、私の話が終つてみたら、本当に彼らは喜んで、顔が変わってくる。そうして、バスまで見送ってくれるというような始末ではないですか。

これは神様の真^{ほん}実^{じつ}のものが、とにかくそこで動き始めているところには――人間の霊^{たましい}魂^{たましい}の世界は誤魔化^{ごまか}しが効^きかない――人間の霊魂は何か本質^{ほんしつ}的^{てき}な絶^{ぜつ}對^{たい}的^{てき}なものに触れるまでは、本当に動かないんです。しかしながら、本当に絶對的^{ぜつたいてき}な、本質^{ほんしつ}的なものに触れたらば、人間の霊魂は動き始める。そのように、人の霊魂というものは、神様はいい加減なことで作っていないです、皆さん一人ひとりの霊魂は、全世界とも置き換えることのできない、質を持っている。それは神様の、ある絶對的な質が、皆さんの中にみんな入っている。

そいつがそれと共感するところの波長に出つくわすという、「ああそうだ」といって目が覚めてくる、この波長にぶつかる。ラジオみたいなもんです。スイッチが回つていつて、その波長にいくると、同調すると、鳴り出す。オール・ウェーブは世界のいろんなのがこの部屋の中に鳴り響いているんだが、聞こえない。これは電波が音波に変えられなければ、そして波長がちゃんとあわなければ。

霊魂が何か本当のものにぶつかつたら、

「ああ、そうだ!」

というものに来ているのに、そこまで霊魂を開かないものですから、いつもそこにふたをしているものですから、せっかく来て近づいているのが、入ろうとしたって、入れないじゃないですか。

「我、戸の外に立ちて叩く。汝開かば、我うちに入つて、お前たちと一緒にご馳走を食べるよ」



と、キリストはあのヨハネ黙示録の第3章のところで言ってるじゃないですか。

「私は外で戸を叩いている。皆さんの戸を叩いている。ノックをしているのに、なぜ開いてくれないのか。入ったら一緒にご馳走を食べようと思ってるのに」

と。キリストという驚くべき永遠の生命という御馳走を与えようというのに、なぜ永遠の生命という御馳走だけは「要りません」というのですか。それもご勝手ですよ、いやならよしたらいいでしよう。

けれども、キリストの恩寵が私たちと“be”、「一緒に」歩いて行つた。キリストと一緒に歩いて、なんとかして靈魂の中に入ろうと思つて、彼はこのイスラエルの歴史から、キリストの受難、復活のことを語られたんでしょ。

「わが言は靈なり、生命なり」

と。そうしたらば、

「どうか、もう夕方になつたから、家に入ってください。一緒に入つて、夕御飯を

食べてください」

というわけで、これを迎え入れた。中に入つたんです。“in”、「の中に」です。

ヒルティの『眠られぬ夜のために』第2部の訳本があるから、読んでみます。「2月11日」のところです。

「人生の目的、目標はオーソドックス、正教信奉者にあるものではありません。この点では宗教改革自体も甚だしい自己欺瞞に陥っていました。そうではなく、むしろそれは善くなること、即ち、できるだけ近く実際に神に接近することです」

実際に神に接近すること。それは人間の側からはなかなか接近しないのに、キリストは近づいて下さったんですよ。福音とは即ち、私たちに近づきであつて、天国は近くなつて来た。そうしたら、キリストは何と言われたか。

「心の貧しき、靈の貧しき者は幸福なり。天国はその人のものなればなり」

靈の貧しき者、靈は本当に魂が貧しくて、何も私はありません、信仰も私はありません。私はそうです、信仰はありませんよ。皆さん、私は固い信仰を持っていると思つたら間違い。固い信仰なんか持つてないんです、私は。私はそんな信仰はきらいです、固い信仰なんてのは。私は無信なんです。無信、絶信というものなんです、私は。「へえ、そうですか」と。そうなんです、本当に。私は何にもありません。私はダメなんです。これを

「靈魂が貧しい」

という。キリストが言われたんです。キリストは靈魂が貧しかった。キリストは靈魂が大いに豊かだと思つたら、とんでもない間違い。キリストは靈魂が貧しかった。

「私はなんにも言えません。私はなんにも出来ません」

と、キリストはヨハネ伝で言つてらつしやるじゃないですか。

「私を遣わし給ひし者の、御意を行つていただけです」



「わが教えはわが教えにあらず、我を遣わし給いし者の教えなり」

と言われた。キリストは、自分は“something”〔何者か〕でない、“nothing”〔何者でもない〕である。“Nicht”、無であると言っておられる。そうしたら、彼は神の無限体となった。そして、彼はそれを私しない。いつも神の無限、それだけが彼において動いていた。無信、絶信という。

「私は信仰も何ありません。キリストが素晴らしい、キリストが私の生命です」

というだけです。信仰とか何とかいうものじゃない。

「我、信ず、信仰なき我を憐憫^{あわれみ}給え」

「我、信ず、無信の我を憐れみ給え」

ということなんです、あの「信仰無き」というのは。無信であるから信ぜる。何かがあったら信ぜられないんです、私の側に。私が何か私していたら、

「キリストが100%である」

とは言えない。

●蜘蛛の巣の如く吹き飛ばされる

私はむしろマイナス100です。マイナス99、そこにたった1つの――始めはマイナス100だけれども――そこにたった1つの芥種の如きキリストが、霊核が入ってきた、この原始力、原始核というのが。これは始めの原始の核です。キリストというこの原始核が入って来ました。そうしたら、こいつがマイナス99をすっ飛ばしていく。必ず勝つ。

これを私は信じている。その他のものは何も信じない。私の「自分の信仰」なんて、絶対に信じないんです、私は。私は自分の信仰なんてものは絶対に信じません。そんなのを信じて「信仰」だの、「信念」だなんてやってたら、私はパリサイになるから。それをはじめやったのはパウロです。

「そんなもの棄てた！ 私はキリストだけだ」

と言ったのがパウロなんです。それでこの1が無限に展開を始める。

「我信ず」

とは、

「貴神^{なんじ}を信ずる」

で、我が信仰を信じているんじゃない。キリストを受けとり、信じ受けとっている。キリストが私たちの一切の限定を越える驚くべき者であるという、これを受けとって、

「この信があれば山に動けと言っても動くぞ」

とキリストが言われた。水を割って読んではいかなですよ、聖書を。ここに今、現象するかしないか、ではない。根源の世界においては必ず現象している。この根源の世界において必ず現象していることを、本当に受けとっているかということ。



このキリストがどうしても中に入りたいという。

「いわゆる正統主義を立てているのは、自己欺瞞である。

と、ヒルティ先生は言いました。

そうではなくして、もつと善くなること、即ち出来るだけ近く実際に神に接近することです。

神学ではない。信仰箇条ではない。聖書研究ではない。事実、神に近づくことであると言う。

真乎のキリスト教こそ確かにそこに到達する一番近い、最上の、そのみが真に聖意にかなう歴史的に与えられたる道であります。」

と、ヒルティが言わんと欲していることは、「真乎のキリスト教」とは、私が申し上げているこの原始福音というものです。

ウルエバンゲリウム

原始福音、“Urevangelium”。ウルエバンゲリウム。ダイスマン〔註：Gustav Adolf Deissmann グスタフ・アドルフ・ダイスマン（1866～1937）。ドイツのプロテスタント神学者であり、新約聖書で使用されたギリシア語の指導的研究で最もよく知られる〕がキリストの生まの言葉に対して“Urevangelium”〔原始福音〕と言ってくれた。

「ああ、本当にダイスマンさん、そうだ！」

と。私はダイスマンのものを読まない先にそう言っただけです。ダイスマン一人がこれに応えてくれたから、私は本当に嬉しい。しかし、ダイスマン先生が言わなくてもいい。なにも「U」〔原始〕なんて言わなくていい。「福音」なんですよ。

ところが、福音がみんな、あるズレを来たしまして、何か置き換えをやっていたり、水を割っているから、「それはいかん！」ということなんです。

「私は福音をつかまえた」

なんて言っているではありませんよ、皆さん。誤解しては困ります。私は福音の中にただ入っていくことだけで、私は何者でもない。ただ福音は無限のものであって、この限りなき世界に私は限りなく入っていくだけであるというんです。私はこの世界で本当に満ち足りました。しかしながらまた、無限に進んでいく。満ち足りながら無限に進んでいくという世界です。それが本当に入っていく世界です。

「哲学的傾向の強い人たち、また私の経験によれば唯一神教徒（ユニテリアン）や、いわゆる改革派の人々（レフォルマトール）もこの結果に到達することは遙かに困難です。

みんな出来上がった何かでもってやっている。置き換えている。

もつとも神の恩寵はすべてを成し給うに違いないのです。

その次に面白い言葉が書いてある。

我々の思想体系などというものは、神にとつては何らの障害ではありません。彼の霊のひと息吹が一瞬にして破りうる蜘蛛の巣に過ぎません。」

人間の編み出したどんな思想体系も神学体系も、信仰箇条の何とかも、偉そうな教説も、



神様の霊のひと息吹に遭つたら、蜘蛛の巣の如くに吹き飛ばされてしまうよ、という。なんと愉快な言葉でしょう。私はこの『眠られぬ夜のために』全巻のうちでこの言葉が一番好きです。神様の、キリストに現われた息吹、その聖霊！これを何をもって置き換えんとするか！この生命の中に入らないで、何がキリスト教か。

パウロがコリント前書15章で、

「イエス・キリストがもし本当に甦り給わなかったならば、私たちの信仰はす

べて空しい」

と言った。キリストの十字架の贖罪あがないというものは、十字架にかかりつばなしじゃない。完全に贖って、私たちを罪から解放したらば、その解放したところに、ものすごい永遠の生命を充実させようというのが、このキリストの福音の道です。いつもパウロはその二つをハッキリと言っている。ローマ書3章を開いてごらんさい。死へのバプテスマが生命へのバプテスマと変わっていく。

この二人の旅人が、

²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』

と言って、イエス・キリストを宿した。その情景を思つて、キリストを幕屋の中に、家の中に、ヒュッテの中に入れてあげた。いや、キリストは本当にこれを望んでおられた。そして彼らを祝福してやろうと思つておられた。

乃すなわち留らんとて入りましたもう。³⁰共に食事の席に著つきたもう時、パンを取りて

祝し、

勿論、この時は過越の祝、除酵祭の時ですから、まだ種なしのパンです。

擘さきて与え給えば、³¹彼らの目開けてイエスなるを認む、

さあ、開眼しました。その時に眼が開けて、イエスなるを認めた。キリストがパンをさいて食べるということは勿論、その当時よくやられたことなので、一般にも行われたことで、何もそれは不思議なことではない。祝福するって、大体、主人がやるんですけれども、この場合はキリストが主人になつて、パンをさいて与えた。

その話を聞きながら、パンをさいたキリストに出つくわした時にこの二人の者はあの最後の晩餐がハツときたかも知れません。それはわからん。おそらくそうでしょう。それで、

「ああ、これは私たちに本当に生命を与える神であつた。いや実に、キリストであつた」

ということに気がついた。キリストは三人称的に語つておられたようですが――「私だ」とはおつしやらない――けれども、彼らはその時に、

「ああ、これがキリストであつた。これが復活のイエスであつた。こんなに近づき、こんなに入って下さつたのに、まだ私たちはわからなかった。ああ、これがキリストであつた！」



と言って目が覚めた。それで、イエスは、その瞬間が目的です、目的は達しました。

而してイエス見えなくなり給う。³²かれら互に言う『途^{みち}にて我らと語り、我ら

に聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』

後から思い出して、キリストがあの時、私たちが聞いた時に、一生懸命にイエスが語って下さった。その時になにか知らんが、私たちの心の中が、胸の中が燃えたじゃないか。「なるほど、これは霊なる生命の言であつた」ということにあとから気がついた。

³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕^{とも}なる

者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦^{よみが}えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の

者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを

述ぶ。

もうそのキリストにぶつかったから、眼は開けましたから、もう彼らはじつとしていらなくて、大急ぎでエルサレムに行つたんでしょう。

●自然・必然・自由が一如

キリストの生命を戴きますと、私たちは何か知らんが、それを表現せざるを得ない。画家は絵をもつて表現する。音楽家は音楽をもつて表現する。学者は学問をもつて表現する。台所で働く人はその働きにおいて表現する。一切のことにおいてイエスを表現できるんですよ、皆さん。イエスを表現するのは、教会堂でお説教をすることがイエスを表現することじゃない。その生活において、その人の全実存を通して表現されるところのものです。

この使徒行伝4章のところに、ペテロがもう御霊に満ちて言っているじゃないですか。キリストと偕にあつた時のペテロよりか、このペテロは――イエスと一緒にいたペテロ、ヨハネというような者は、イエスがまだ地上に居られたところの“bei”〔共に〕の世界です――ペンテコステを、聖霊の降臨を通していますから。ペテロの中に、パウロの中に、御霊のキリストが御座るんです。だから、4章19節に、

「¹⁹ペテロとヨハネと答えていう『神に聴くよりも汝らに聴くは、神の御前に

正しきか、汝ら之を審け。²⁰我らは見しこと聴きしことを語らざるを得ず』」

使徒4・19(20)

ざるを得ない世界です。ざるを得ない世界が本当の世界なんです。「べき、べからず」じゃない。“nicht anders können”「ちるを得ない」世界です。“müssen”〔必然〕の世界なんです。道德の世界は“sollen”〔当為、すべき〕で、自然の世界は“müssen”だという。「べき」の世界で、自然の世界は自然法則だという、いや、自然法則よりもつとすごい必然法則の世界がある。これは、神の御意を本当に内に受けとっている。この自由な歩き方は、自由にして必然、必然にして自然、自然・必然・自由ということが全く一如の世界です。これは御霊の世界がこれなんです。神の御霊が宿っている世界はこれなんです。



「キリストを外側にして、それを学んでいこう」

なんていう世界ではない。まねしている世界ではない。中に入って、動かされている世界です。原動力は、石炭は燃えている、機関車は走らざるを得ず、ピストンは動かざるを得ずという。だから、

「お前さんたちに聴くのと、神様に聴くのと、どちらが本当か。私たちの中に入ってくる、この焼付けというような言葉をどうしてくれるんだ」

という。エレミヤもそう言った。

「エホバのことは我心にありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるがごとくなれば忍耐しのぶにつかれて堪難たえがたし」(エレミヤ20・9)

と。皆さん、いろいろな問題をお持ちかも知れない。また、いろいろな失敗を犯したかも知れない。いいですよ。この復活節に、キリストと偕に完全に十字架されて、

「我は十字架されたものである」

と。恩寵ですよ。皆さんが力りきんで十字架するんじゃない。キリストが私たちに代わって、完全に十字架にかかったから、これを本当に受けとれば、私たちは霊の現実で十字架される十字架されてある。それを本当に受けるんです。

「本当に受けとるって、この私は、なかなかそんな固い信仰がありません」

なんて、またそう言います。そんなじゃない。私は信仰がない。私は自分の信仰なんてものにたよらない。私はダメなもんです、なんでもありません。

ところが、イエスはそんなにして下さったんです。ただそれにぶつ倒れるだけです。その驚くべき恩寵の前に倒れる。誰でも倒れることはできるでしょう。立つことはできなくても、倒れることはできるはずです。人間、一番楽なのは、寝っころがることです。ぶつ倒れることです。

「ぶつ倒れたら本当に立たせてやるよ」

という。

「私は自分で立てる」

なんて思って、自分で信仰を立てているうちはダメだよ。ああ、ぶつ倒れなさい。そうしたら、ぶつ倒れるとは、十字架につけられている我を本当に受けとることです。

「我、キリストと偕に十字架につけられたり」

とパウロが言った。あれは、

「パウロ先生は偉いからそんなことを言った」

なんて、そうじゃない。皆さん一人ひとりが、これが言えるまではキリスト者ではない。また、万人に対して、これは言える言葉なんです。難しい言葉が恩寵ではありませんから。



●肉体は散っても生命は散らない

誰でもが可能なことが恩寵という。空気は誰でもが吸っている。

「私は、空気は吸えません」

と誰が言いますか。「水は飲めません」という時はあるけれども。「空気は吸えません」ということは誰も言えないはずです。寝ていても空気は吸っている。それは、空気は一番、我々の生命に大事なものです。ちっとも価値がない。誰も空気だけはお金を払わない。水はある程度、お金を払わなければならぬけれども、空気はお金を払わない。これは無価値です。無価値なものが無限の価値を持っている。即ち、キリストの十字架は、私たちにとっては何の代償も要らん。学問も要らなければ、健康も要らなければ、信仰的な強さも要らなければ、何も要らない。何か条件付きで「来なさい」と、キリストは言っていない。

「絶対無条件で来なさい。絶対無条件でよろしい」

「うむっ！　そうですか！」

これが靈魂の奥底から本当に言えたら、あなた方は引っくり返る！　そうしたらば、私は「自分」から解放されていた。私は相変わらずダメだけど、そんなものはやはり問題にしません。そして、問題にするのは、ただこのキリストの生命、永遠の生命、よみがえったこのキリストを受けます。私はこれを吸います。

「私の靈魂はこのキリストを空気よりも吸います」

という人になったらば、皆さんはぐんぐんと展開します。この生命をキリストは、死に限定されている者に、

「この永遠の生命を、復活の生命を、お前たち、受けろ！　原子爆弾が、水素爆弾が爆発しても、肉体は散っても、お前の生命は絶対に散らないんだ」

という、この生命の世界に入らなければ。
日本人というのはなんてケチくさいんだと私は思う。こんな驚くべき福音に、何故、拒否しているか。もう本当に情けない始末です。日本人はせっかく神様からいろいろな性格をもらっているいい民族なのに、

「一番最後のとっておきに、お前たちを最後につかまえるんだぞ」

といって、世界の歴史の最後の段階において臨んで来ているのに、それを拒むのか。エマオ途上で、斯く語りかけて、

「はい！　さあどうか入ってください」

という、この二人の旅人にならないのか。皆さん、このキリストを受けとつたらば、全世界が逆らおうとも、どんなにクリスチャンがなんと言おうとも、義務も責任も要らん。生命をもって、それで証言してください。

「我がうちにあるキリストの生命を如何せん」

と言ってください。もう一切の問題は乗り越えていく。そうして、今までの瞬間まで、あ



なた方の中に何かの問題があったとしても、何であつても、この生命を受けとつたらば、このキリストの生命を生命とし、光を光とし、目を目とし、耳を耳として行くようなことになって来たらば、いや実にそれは、近く、祈り、かく信じていく時に、必ずあなた方がその内的現象に於て内的現実において、その現実を進んでいるんです。

「10年信仰してたから、20年信仰してたから」

と、そんなことじゃないです。この信において、今まで10年、いわゆる信仰なんかしているよりか、遙かに先に行く。そういう質的な世界に本当に入らないで、あなた方の命をキリストは惜しんでいる。

「何故そんな命でもって満足しているか。この永遠の生命を何故受けないのか」

と言って、キリストは、

「聖霊は呻き給う」

と書いてある。キリストの霊は呻いているんです。

●血気の体あり霊の体あり

今、大事な二十歳前後に向かつているような青年の方々は今こそ突破すべき時ですよ。そして本当に、それは芸術の世界、絵の世界であろうと、音楽の世界であろうと――皆さんみなそのホープがあるでしょう――このキリストを受けたらば、本当の展開が、今までの日本の芸術が生み出せなかったようなものが、生まれてくるんです！

私も何か課題を負わされています。それを果たすまでは死ぬわけにいかん。この原始福音を戴いて、私たちは犬死いぬじにするわけにはいかない。けれども、どのようなことがあつて仆れるか知らん。仆れても大丈夫！ なお次の世界に進んでいく。

「石は叫ぶ。アブラハムの子を石から起こす」

とキリストは言われたような驚くべき現実です。福音は、キリストの福音は進んで行きます。他の、「何々先生の福音」はどうなるか知らん。ただイエス・キリストの福音は進んで行く。私たちはこのイエス・キリストという福音の中に入って、その全存在を以て証していく。こんな嬉しい生涯が外にありますか。皆さん、復活の生命であればこそ、永遠の生命であればこそ、その実存を以て身証あかしした、この十字架の贖罪を以て私たちに完全に道を開き、もう何にも力は要らない。私たちは、扉は実は開けられていたのに、何故閉めようとするか、ということですよ。

そうしたらば、この復活のキリストが入るといふ事態は、直ちにこれはペンテコステの事態に通ずるのです。だから、

「お前たち、深く祈れよ。深く私の中に入りなさい、交わりなさい」

と。そうしたらば、キリストの霊は、この使徒たちに五旬節の祈りを深くしていったらば、ある時、驚くべき風の如き現象を通して現われてきた。これはペンテコステ。



皆さん、こうして復活祭をかくして迎え、本当に一つの活路が切り開かれてきた。あとこれからは、祈りだけが残っている。そうして本当に、祈りをもって進んで行けば、必ず驚くべき、

「ああ、わが目はこれで本当に開かれた」

というところに来る。私はとにかく、そういう現実をいっぺん突破したから、聖書が変わってきた。聖書の響きが違ってきたんです。

「ああ、聖書はこんなに私たちに楽な書であるか、こんなに親しい書であるか、読んでいけば直ちに生命が来るような書であるか」

に気がついた。「わかる、わからない」じゃない。私はこの東京で、どんなに何と言われたっていいです、そんなことは。さつきペテロが言った通り、

「汝らに聴くよりも、私は神に聴かざるを得ず。キリストに聴かざるを得ず」

と。たった一人になつてもなんでもいい。私は絶対に退くわけにいかない。このキリストという驚くべき推進力が、原始力が私を推進させるから。

何のためにキリストは斯く甦えり、永遠の生命を、その地上の生涯を通し、更に天界に昇られて、証されたか。こうして、

「この生命を御霊をもつてお前たちに、現実を与えるぞ」

といって約束されたのです。それで、

「キリストは苦難くるしみを受けて、三日目に死人の中より甦えり、且つその名によりて罪の赦しを得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべし。汝らは此等のことの証人なり」

「視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。即ち、聖霊を汝らに贈る。

汝ら上より能力ちから、聖霊の能力を着せられるまで、都に留まつて深く祈れ」

というんです。この復活のキリストが現われてきて、

36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんじらに在れ』と言い」給う。37 かれら怖おそじ懼れて、見る所のものを霊たまならんと思ひしに、38 イエス言ひ給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑うたがひおこるか、39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫なでて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』40 「斯く言いて手と足を示し給う」41 かれら歡喜よろこびの余に信ぜずして怪しめる時、

あんまり嬉しいもんだから、今度はちよつと、おかしいことになった。

イエス言いたもう『此処ここに何か食物あるか』42 かれら炙りあぶたる魚一片ひときれを捧げたれば、43 之を取り、その前にて食し給えり。

え!? 復活のキリストがそのようなことをされた。今の大方の神学者、牧師さんはこれをまともから受けとらないでしょう。可哀相なもんです。そんなことじゃない。私はある偉



い人たちの集まりの所で、

「私はその通りだと思います」

と言ったら、その人達は笑った。いいです。笑った人達は自分たちの信の世界に、聖書の現実に水を割っているだけのなし。彼らに語りかけ、またパンをさいた——このパンをさいたところはいいと思っている——同じパンをさいたキリストが同じお魚を食べて何がわるいか。

このような完全に靈化された驚くべき次元の事態は、私たちの想像を絶する。しかし、これは本当です。天界にキリストは本当に姿を隠してしまふ。この驚くべき生命は私たちの次元からは、頭脳^{あたま}では絶対に理解できないが、しかし、これは本当に自分たちの靈魂^{たましい}をその御霊の世界に入り行く時に、「然り！」といって本当に受けとることのできることになる。私たちのこの現実とは、ただ摩訶不思議なことを言ってるんじゃない。キリストの霊の、御霊の現実というものは、どんなに自由な、またどんなに高次なものであるか。永遠の生命は、パウロがコリント前書15章の終りの方で言っている通り、

「血気の体あり、霊の体あり」

で、この「霊の体」とパウロが言っているのは、キリストのこの事態であります。

ヒルティもこの「2月10日」のところでこう言っている。

「ひととは人生の意義を充分さとするには如何なる哲学、宗教に依るも駄目で、是非とも人生をば、ますます高い目標を追って進歩するも一つ先の生存のための学校と見做さねばなりません。即ち、この学校時代に私たちはここ（地上）ではまだ私たちの身につけている動物的なものを、肉体と共に最後に完全に脱ぎ棄てて、自由な精神的存在として

これは「精神的」という訳があまりよくない。「靈的」と訳した方がいい。

靈的な存在となる用意をしなければならないのです。また実際、人間の最奥の魂の要求もやはりそれを目指しているのですが、これに対抗するのは例の悪であって、それはあらゆる手段を画して、ちょうどその人間の完成を妨害しようとするのです。この地上生活を終る際に、肉体なしに靈的生活を継続し得るほどにまだ充分靈化されていない人達や、それどころか精神を欠く単なる物質になってしまっている人達は一体どうなるか、私はそれを知りませんが、……」

と。それで、我々もパウロが、

「栄光より栄光に、遂にキリストの像^{すがた}に化する」

といって、我々の中に生長しつつあるところの、キリストの永遠の生命というものが、肉体は滅びていっても、この霊体というものは、靈質的なものは、展開していく。これは観念でない。事実、そのようである。ですから、それが自由自在に働きますから、ある時は本当に、こんなようにして一体、病氣も治るものかというようなことも起きるし、こんな



にもまた、ものがわかるかということもあろうし、それがいろいろなその人のなしていることにおいて、現象してくるわけです。

私たちが、本当に復活のキリストの近づき歩きつつあり給うことに気がつき、そして、これを中に迎えるという事態。そこにルカ伝24章から大事な事態を一緒に皆さんと学び――これは決してただ聖書を学んだなんてことではなくて――皆さんは今、この集会の始めよりも皆さんの中に、

「なるほど、私はこのところで、ある乗り越えを始めている」

ということを受けとつていらつしやると、私は思います。そうして、人間の側からはどうにもならない、罪、死の限界の中から突破して、生命の世界が、本当の義の世界、本当の愛の世界がこのキリストという福音を現実を受けとりつつ、はち切れるような生き方をやって行く。躓いても、転んでも、倒れても、滑ってもいいです。必ず前進できますから。そんなことはくよくよしなくていい。終わります。

● 祈り

昔、在^{いま}まし、今、現に在り給い、また必ず来たり給う、主イエス・キリストの父なる御神様！ この1957年の武蔵野幕屋における復活の集いを、兄弟姉妹たちと今、一切の過去を乗り越え、キリストの現実につづき、エマオ途上の二人の旅人の如く、主イエス・キリストの御近づきに接し、

「神様！ どうかイエス様が私のこの中に入ってください」

と、迎え奉り、人々の中に全的に宿り給う主イエス・キリストを感謝いたします。

お父様、本当に福音は全くこの全的な投入にあり、また、キリストが全く、全的に内住し給うこのご恩寵にあります。神様、感謝いたします。

どうか、私たち、この聖書の中に深く身を投じ、聖書を私たちの真の第一の糧とし、これを朝^{あした}に夕べに、明日も次の日も、またその次の日も、聖書一卷をもつて、本当の糧として歩いていくことができますように、願^{まづ}い奉ります。

この復活節をして単なる一瞬の感激にあらず、本当に人生の一つの大事な新しき踏み出しとして、いよいよ今日よりも明日は、明日よりも次の日はと、この兄弟姉妹たちを、いろいろな人生のこの艱難辛苦、いろいろな課題をなお突っ走って進ましめ給わんことを願^{まづ}い奉ります。

大丈夫！ キリストに依り頼む者は、絶対に辱^{はずかし}められません。本当にイエス・キリストを受けることが一切であります。そこからして、全てのことを進展せしめ、そして私たちが自身がキリストの体^{からだ}となり、キリストの天国体となり、そして、到るところに天国を現じていくことができますように願^{まづ}い奉ります。

この地上には何処にも、このキリストを迎えざるどころには希望がありません。しかし、



キリストを迎え奉るところには、一切の希望が生じて来ます。この世界がどういようように進展しましょうとも、どうかそのために、「み国を来らせ給え」との祈りは、即ち私たちの実存の祈りとして、本当に^{はらわた}腸から言わしめてください。

神様、この兄弟姉妹たちと偕に、今日、誰かれではありません、本当に一人ひとりが、自分自身がキリストを受けとつて、そうして、

「ああ、聖書はわが書なり」

と、高らかに歌っていくことが出来ますことを感謝いたします。

どうか、一切の過去を乗り越えます。そんなことはもはや問題にしません。問題はただキリストだけです。このキリストを受けて、この兄弟姉妹たち、本当に^{たましい}贖われた靈魂をもつて、贖われた身を以て、今、進ましめ給わんことを願ひ奉ります。

今！ 今こそ！ 本当にこの原始の福音を受けとるべき時です。そのための証人として選ばれました。私たちは、その証人として選ばれたこの貴神^{あなた}の使命をキリストの御霊の御力によつて進ましめ下さらんことを願ひ奉ります。

この永遠の生命を我らに賜りたる以上、もはや何がどうなつてもよろしくあります。パウロと偕に、一切の秘訣は得たりであります。

お父様！ これに水割るものは信にあらず、全くこの霊^{おんいのち}の御生命を受け、本当に捨てたパウロと偕に、ペテロと偕に、ヨハネと偕に、これを全生涯をもつて告白し、讃美していきます。そしてこの聖書が、私たちの本当の歌となることが出来ますように願ひ奉ります。

兄弟姉妹たちが、永遠の瞬間をつかませられ、イエス・キリストの近づきに接して、迎えられて感謝であります。今日来られなかったところの、あの杉山兄弟、また原兄弟、その他、一人ひとり名をあげることはできませんが、どうか、それぞれにおいて、真に復活のキリストを迎え、エマオ途上の旅人となつて、キリストと偕に、パンをさかれ、目開けて進んでいくことができますように願ひ奉ります。

お父様！ 嬉しいのです。どうか、この絶対不敗の、この福音の勝利を、このキリストの勝利を歌いつつ、進ましめてください。日本の国に、もう八方塞がりでは何処にも望みのないこの国に、到るところ冷やかにしてつめたく、またいろいろな悩みがあるところに、どこへ行つても問題の解決のないところに、ただ福音だけがこの日本を救うところのただ一つの道であることを、真に身を挺して^{あかし}身証する、その一人ひとりがその生涯を通して身証することが出来ますように。

お父様！ できます！ 必ずできます！ 兄弟姉妹たち、本当に高らかに、キリストを歌いつつ進んでまいります。こんな嬉しいことはありません。これを知らないところの人たちに、どうか、如何にもして、一人、二人、三人と、真に質的な展開を起こすところのキリスト者を起こし給わんことを！ キリスト者とは、パリサイでもなんでもありません。最も人間らしい人間のことです。



お父様、最も人間らしい人間になり給うたこのキリストを受けとるために、これを身証^{あかし}し、その身証のためには、といって、一人ひとりがその一切の従来^{従来}の行きがかりとか何とか、一切のものをのりこえて、水を割らずに、主イエス・キリストの中に、全的に投じて行か^{あかし}しめ給わんことを、切に切に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と願ひ、聖名^{みな}により捧げ奉ります。アーメン。

●感話懇親会での感話

いろいろな課題を負って、また苦難の中を通って来られまして、人間的な問題もいくつかあったようですが、けれども、私はその一つ一つに本当に同情をもつて承りました。キリストは、

「思い遣^やること能わぬ者にあらず」

キリストは思い遣る「ジンパテオ」――その人と一つ心になるという字です――その人と一つ心になる。キリストは極みまで愛するというのは、観念ではなくして、その人の中に、本当に彼は心を心として入っていく。キリストは、いわゆる人間の同情と違ひまして、その人の心を変質させていく。その人の中に、彼は心を心として入っていく。キリストは、いわゆる人間の同情と違ひまして、その人の心を変質させていく。その人の^{たましい}靈魂を変貌させていく。これがキリストの「ジムパテオ」です。

いろいろな問題に出つくわしますが、しかし、それがどんなに成功のように解決を見たとしても、またそれがどんなに行き詰まったとしても、それはもしキリストに出つくわさないで悩んでみたり、キリストに出つくわさないで解決してみたら、どちらも駄目です。人生のすべてのことは、

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらでは父のもとに行くことができ
ない」

これはハッキリしています。イエス・キリストに来るということが、そのもとに立ち帰るということが、ルカ伝15章が、福音のアルファであり、オメガであります。私たちはキリストのもとに立ち帰ることが本当の前進なのです。

人生は悔改の連続であります。そして、この悔改とは極めて積極的なことなんです。決して何かくすぶったような、しめつぽいようなことじゃない。

原田君がつぶさに証言されましたが、原田君は決しているんなことを、^{あたま}頭脳では苦しまなかつた。全身をもつて苦しんだ。だから、その展開は素晴らしい。それは何かというと、何処においてもこれはキリストに、遂にはぶつかるはずのものなんです、人生は。私たちにこの神様が近づいてきた――午前にも申し上げましたが――近づいていらつしやつた。遂にキリストの受肉をもつて、降り近づいて来た。そして、「つらつら目にて、つらつら耳にて、つらつら手にて」という現実^{現実}にまでキリストは、きり込んで来られた。そして、ど



ん底から私たちを支え上げ、変質変貌、方向転換させようというのです。

皆さん、いろんな経験に出つくわして、行き詰まって、悲しくて、いろいろな事になります。私も若い時、いろんな事があった。けれども、このキリストが入って来た。

「ああ、向こうの人は私の中のものを見損なっている。私はどんなに言われても抗弁しない」

と。私は抗弁しません。私はなんと言われても、誰からどう審かれても、私は自分を弁解しません。けれども、私の中に来たり給うところのこのキリスト、これを告白することだけは――さきほどから杉本君も長坂君もいろいろな方々が本当に告白されたように――

「これを如何せん」

というわけです。ですから、

「ああ、私の体が弱いので、あの青年は私を棄てたのか、ああ、結構だ。しかし、可哀相な人だ。この私の中に居るキリストが見えないか」

というわけです、皆さん。それだけの、キリストにおける、自己を絶した自信を持つてください。この自己を絶したキリストにおける自信というものは、私たちが無、というときに、完全に無限という響きが来るのはそこなんです。虚無の無ではない。即ち、自己が棄てられているところに、本当にキリストの無限が来ている。そのキリストが動いているところには、必ず神様が、

「お前みたいな器はもつと素晴らしい青年と組み合わせるよ、心配は要らん」というのです。人間の健康を見て、どうのこうのと言っているような青年ならば、

「お前に価値しない青年である。お前はもつと素晴らしい靈魂の青年と組み合わせるのだ、ああ、ある時はお前はひとりでいいんだ」

それは神様がその人にのつべきならないうり方をもつて導いてくださいます。

何に満足しても、何に喜びましても、キリストに喜ばない喜びは、必ずダメになっていく。キリストの喜ぶ喜び、

「我、エホバを楽しむ」

とイザヤ書にあります。

「我、キリストを楽しむ」

というこの人生は、逆説的にいえば、本当の意味において樂觀説です。樂觀説というのは快楽を求めているのじゃない。キリストが入って来ると、^{よろこび}歡喜が溢れるんです。結果してくる、泉^{すがた}している相なんです。ですから、これは必然、自由、自由、必然なんです。生命が直ちに法則なんです。何か頭で法則なんでものを考えているんじゃない。

そういうような具合にして、皆さん、我に絶した自信を――今度は私は言いますよ――我に絶した自信を戴いてください、キリストから。

私が我に絶した自信を戴いているから、全世界のクリスチャンが、



「あれは異端である」

と言つても、私は天界から御霊が、またパウロが、

「大丈夫だよ！ お前、それでいいんだ」

と、加勢してくれる。この天来の声に対して、

「我、キリストの、神の声に聴くか、人の声に聴くか。我、神の声に聴かざるを得ず」

と、ペテロ、ヨハネが言つた通りです。パウロは使徒行伝24章で、

「ナザレの異端の首^{かしら}」

といつて、悪口言われた。キリスト教の大黒柱みたいな、このパウロ先生が異端の首ですぞ。それよりもっとすごい親玉は、イエス・キリストが異端の親玉です。いわゆる聖徒はみんな異端。ところが神様の目から見ると、これが本当の本流なんです。“Umwertung aller Werte”（一切価値の転換、ニーチェの語）と言いまして、価値の転換であり、転倒ですよ。

それで皆さん——この自信は私するのではない——自己に絶したこの自信を本当に持つていく。その自信は何処に持てるか。このキリストの十字架・復活・聖霊、三相一貫のこのキリストにおいて私たちはこの自信を戴くんです。そうして、進んで行きます。

もう皆さん、どんな問題が今、自分の頭の中でひっくり返ろうが、そんな事は問題でない。この道を、この生命の世界を、確かにこの福音を受けて、この復活節にあなた方がキリストと共に復活しないで、何の復活節か！

「イエス・キリストと共に本当にこのエマオ途上の旅人と私はなりました」

と。皆さんも、午前旅人となつた。そうして、イエス・キリストと一緒に歩いた。

「ああ、あれがキリストだつたのか。ああ、ここに私たちに本当に御霊のキリストが来ていらつしやつた」

と言つて開眼したじゃないですか。そうして、

「どうか、イエス様、この中に入つて、一緒にご飯を食べてください」

と言つたのではないですか。この事実、この迫り来るところの、圧倒的な恩寵に対して何を考えるか。考えるものはなんにもない。全てはすつ飛んでいるのです。

どうか皆さん、自分なんか見るんじゃないですよ。キリストを見て、このキリストに宿つて戴いて、自分はどうでもいい。

「ああ、これによつて行きます！ これが勝つて行きます！ いや、すべて人を本当に幸福にしていけます！ この中にあるところのキリストの生命は如何なる制限をも受けません！」

というのであります。そういうわけで、もう男も女も、若きも老いたるも同じこと。本当にキリストの生命であります。

私は今、このルカ伝のあるところと、ヨハネ伝のあるところを読んで、直ちに祈祷会に



入ります。

●復活祭 祈禱会

ルカ伝23章32節から49節。

「³²また他に二人の悪人をも、死罪に行わんとてイエスと共に曳きゆく。

³³ 髑髏されしうべという処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。³⁴かくてイエス言いたもう『父よ、彼らを赦し給え、その為す所を知らざればなり』彼らイエスの衣を分ちて籤取にせり、³⁵民は立ちて見いたり。司つかさたちも嘲りて言う『かれは他人を救えり、もし神の選えらび給いしキリストならば、己をも救えかし』³⁶兵卒どもも嘲弄ちようろうしつつ、近よりて酸すき葡萄酒をさし出して言う、³⁷『なんじ若しユダヤ人の王ならば、己を救え』³⁸又イエスの上には『これはユダヤ人の王なり』との罪標すてふだあり。

³⁹ 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。』⁴¹我らは為しし事の報むくいを受くるなれば当然なり。されど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』

⁴⁴ 昼の十二時ごろ、日、光をうしない、地のうへ偏あまねく暗くなりて、三時に及び、⁴⁵聖所の幕、真中より裂けたり。⁴⁶イエス大声に呼わりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』斯く言いて息絶えたもう。⁴⁷百卒長この有りし事を見て、神を崇あがめて言う『実にこの人は義人なりき』⁴⁸これを見んとて集りたる群衆も、ありし事どもを見て、みな胸を打ちつつ帰れり。⁴⁹凡てイエスの相識しるべの者およびガリラヤより従い来れる女たちも、遙はるかに立ちて此等のことを見たり。』(ルカ23・32〜49)

ヨハネ伝10章7節から30節。

「⁷この故にイエス復またいい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。⁸すべて我より前さきに来りし者は、盗人なり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。⁹我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入でいりをなし、草を得べし。¹⁰盗人のきたるは盗み、殺し、亡さんとするの他なし。わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。¹¹我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。¹²牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼おおかみのきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、——豺狼は羊をうばい且かつちらす——



13 彼は雇人にて、その羊を顧みぬ故なり。14 我は善き牧者にして、我がものを
知り、我がものは我を知る、15 父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊
のために生命を捨つ。16 我には亦この檻おろのものならぬ他の羊あり、之をも導
かざるを得ず、彼らは我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。
17 之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたび生命を得んために生命を
捨つる故なり。18 人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我
は之をすつる権あり、復またこれを得る権あり、我この命令をわが父より受けたる』
19 これらの言によりて復ユダヤ人のうちに紛争あらそいおこり、20 その中なる多くの
者いう『かれは悪鬼あくきに憑つかれて氣狂えり、何ぞ之にきくか』21 他の者とも言
う『これは悪鬼に憑つかれたる者の言にあらず、悪鬼は盲人の目をあけ得んや』
22 その頃エルサレムに宮潔みやきよめの祭あり、時は冬なり。23 イエス宮の内、ソロ
モンの廊を歩みたもうに、24 ユダヤ人ら之を取囲みて言う『何時まで我らの
心を惑しむるか、汝キリストならば明白あらわに告げよ』25 イエス答え給う『われ既
に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行うわざは、我に就きて証あかしす。
26 されど汝らは信ぜず、我が羊ならぬ故なり。27 わが羊はわが声をきき、我は
彼らを知り、彼らは我に従う。28 我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは
永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪う者あらじ。29 彼らを我に
あたえ給いし我が父は、一切のものよりも大なれば、誰にても父の御手より
は奪うこと能わず。30 我と父とは一つなり』(ヨハネ10・7-30)

● 祈り

憐憫あわれみ深きお父様！ この1957年の復活の日を、朝よりただ今に至るまで、すべてを
打ち棄て、乗り越えてやってきましたところの、愛する兄弟姉妹たちと共に、聖名を讃たたえ、
貴神あなたの聖書みふみを学び、主イエス・キリストの前にひれ伏し、主イエス・キリストのこの御生
命を斯く戴かいたき、彼、十字架にかかり、私たちの罪をすっかり赦ゆるし給い、本当にこの御赦しは、
天上天下、東西古今、何処にもありません。神様、感謝いたします。私たちは既に贖いと
られたのであります。ルカ伝15章の如く、大手をもつて、貴神は私たちを囲み入れてくだ
さいました。感謝いたします。

一切の私たちの躰みきも、罪も、傲慢も、すべてこれを赦し、そしてキリストの御ゆるしは、
驚くべき愛でありました。驚くべき生命でありました。かかるが故に、キリストは復活し給い、
「この生命を受けよ。この愛を受けよ」

といって、生命を、即ち愛、光、真理、義、このような素晴らしいものを、キリスト御自
身を御霊において、私たちの中に宿り給いまして、

「我、今日、汝らの中に宿る」



といって、パンをさいて下さった。神様、感謝いたします。

この兄弟姉妹たちと共に、このご恩寵にあずかりまして、嬉しく存じます。今や、私たちは主に在って、この御霊に在って、心は一つ、望みは一つ、信仰は一つ。神様、感謝いたします。

今日、このようにして、この復活節を覚えたところの、南は九州、北は北海道にわたる、あるいは信州の小諸、また青梅線上のいくつかの幕屋、また、岐阜の山の中の原因君の、幕屋の人たち、また大洗の根本君の群、また福島の加藤さんたちの群、それぞれのところにおいて、今日、覚えた信じます。どうか、それらの者が真にキリストにぶつかり、そして、キリストに出会い、迎え、この一日を本当に祝福せられ、前進して凱歌を挙げ、ハレルヤを挙げて、彼らをして、また同じ恩寵の中に入らしめ給わんことを、切に願ひ奉ります。

お父様！嬉しくあります。私たちは、所は異なっても、時間、空間を乗り越えて、貴神あなたの現実の中に、貴神の幕屋の中に、とり入れられ、全世界の危険な時に当たり、しかし、一切の雲霧をすつ飛ばして、イエス・キリストの光が浸透し給います。

神様、このイエス・キリストの生命は来たり給います。この原子力時代において、真の原始力はキリストの原始力、貴神の原始力は、この私たち子らに新しく啓示され、感謝いたします。

この20世紀の後半において、これを身証あかしせずんば止みません。本当に神様、感謝です。私たちがどんなに退けられ、どんなに何と言われようと、嬉しいのです。この福音の道を行く者は、貴神の道を身証し、本当にキリストの愛とは何であるかを――言葉ではありません――全実存をもつて身証せしめ給わんことを、切に祈願し奉ります。

お父様！一人ひとりの中に、本当にわが自信にあらず、我を絶したところの、キリストの真の実存が臨んで来たことを感謝いたします。キリストの十字架の御恩寵！この復活のキリスト！これを生涯をかけて、味わっていきます。ただこれを受け、体受して参ります。体現あらわして参ります。

お父様、どうか、このようにして兄弟姉妹たちと、大いなる喜びを、使徒たち、天界の天使たち、天軍と偕に、喜び勇んで進んで参ります。この偉大なる聖書、もはや言葉を絶します！この偉大なる聖書、どうか、私たちの中にいよいよ生きてくださり、いよいよ脈々として流れ、いよいよ泉となつて、溢れてください。神様、感謝いたします。

この兄弟姉妹たちと共に、お父様、本当にかく進んでいきます。どうか、一人でも二人でも、私たちは生涯をかけて、隣人に伝えせしめてください。本当に、よきサマリヤ人とならしめ給わんことを。

神様、福音だけを要します今、心からの感謝と願ひ、兄弟姉妹たちのそれと共に、キリストの聖名により捧げ奉ります。アーメン。

